



鐵田信記

438

始



438

36

鐵田信止



新正堂版

特218
766



織田信長



織田信長



例言

一。織田信長は日本全國が大名によつて分割統治されてゐたのを、天皇の御稜威のもと、統一されたる國家となさんと努力した。その努力は彼の死によつて挫折したけれども、彼のよき後繼者豊臣秀吉によつて完遂された。

一。然し、この故に、信長の事業を現代日本史展開の端緒とするには、あまりに、中間の徳川幕府の時代が長すぎる。徳川歴代の將軍がよく信長の志をついでゐるとはなし得ない。現代の日本史は、やはり明治維新史からはじまるとすべきである。

一。また、日本文化史上の織田信長を、安土桃山時代の前半にとり入れることは今日の史學の常識であるが、これは信長の好みと、性格とをよく秀吉がうけついだとの意味においては正しい。然し、信長の現出したる安土時代は、文化史的には、むしろ室町時代の末期、いはゆる戦國時代に潜行し、先行しつつあつた、幽玄、ひややかの文化特質を繼承したる部分も輕視すべ

きでないから、かかる文化特質については、むしろ戦国時代につながらせるのが至當である。本書の末章をなす「文化史上の織田信長」はその心組で書かれた。もちろん、安土時代の文化をつくれる、他のより大なる部分、豪華けんらん、自由潤達なるものについては、當然、桃山時代とつながりをもたすべきであつて、この見方を決して斥けたわけではない。

一。信長の耶蘇教庇護については、當時の墮落せる佛教をにくむ餘り方便として支持したのであるかのやうに説かれる。然し、信長はよほど耶蘇教に深い關心を持つてゐた。私はこの點についてはフロイスの日本史によれる海老澤有道氏の京畿切支丹史話から多くを借りた。

一。本書を稿するに當つては「信長公記」のほかは、左の諸書を主たる参考書とした。

徳富猪一郎著「近世日本國民史」織田氏時代、上編、中編、下編

花見朔巳著「安土桃山時代」一

井上一次、辻善之助監修「大日本戦史」

海老澤有道著「京畿切支丹史話」

洞富雄著「鐵砲傳來記」

西田直二郎著「日本文化史序説」

中村吉治著「日本經濟史概説」

木宮泰彦著「日本民族と海洋思想」

西堀三一著「日本茶道史」

鳥羽正雄著「日本の城」

野上豊一郎著「世阿彌元清」

其他十數書。富山房の「國史大辭典」は未完成ながら第三卷までが大いに役立つてゐる。

尙ほ、参考としたわけではないが、鷲尾雨工氏の小説「織田信長」は實によく史料をつかみこなしてあると思ふ。

目次

第一章 時代

其一	應仁の大亂	三
其二	將軍と大名	六
其三	群雄割據	一〇
其四	尊皇思想	一四
其五	群雄の政治	一九
其六	貿易と倭寇	二四
其七	鐵砲と耶蘇教	二六

第二章 起

其一	幼少年時代	三七
----	-------	----

其二 尾張經營……………四

其三 桶狹間の役……………四

其四 西方經營……………六

其五 淺井氏と武田氏……………三

第三章 入洛

其一 京都の狀勢……………六

其二 尊皇……………八

第四章 近畿經略

其一 但馬・伊勢平定……………七

其二 姉川の合戦……………九

第五章 東海平定

其一 家康と信長……………一〇

其二 三方ヶ原の戦……………一二

第六章 飛騨

其一 義昭と信長……………一七

其二 長篠の役前記……………一三

其三 長篠の役……………一六

其四 信長と謙信……………一四

第七章 安土城主

其一 信長の周圍……………一五

其二 安土築城……………一四
 其三 謙信亡きあと……………一五
 其四 石山本願寺……………一六

第八章 中國征伐

其一 毛利氏……………一七
 其二 秀吉の西征……………一七

第九章 本能寺

其一 明智光秀……………一八
 其二 本能寺夜襲……………一九
 其三 山崎合戦……………一九

第十章 文化史上の織田信長

其一 信長の性格……………二〇
 其二 安土桃山時代前記……………二四
 其三 安土桃山時代の文化……………二六
 (イ) 能狂言……………二七
 (ロ) 茶道……………二八
 (ハ) 和歌・連歌……………二九
 (ニ) 築城……………三二
 (ホ) 佛教……………三五
 (ヘ) 耶蘇教……………三七
 (ト) 美術……………三七

第一章 時

代

其一 應仁の大亂

應仁の大亂も十一年目の文明九年（二一三七）にやうやくをさまつた。京都はおほかた焼野原と化し、寶物、記録あまた灰燼に歸した。都は野邊の夕雲雀、あがるを見ても落つる涙に王法佛法破滅の末世をなげく者は、きのふまで弓箭の間に名を惜しんだ一人の武士であつた。然し、これはいたづらなる感傷の歴史ではなかつた。史上戦争も多かつたけれど、これほどの馬鹿げた戦争はなかつた。誰が勝つたのでもなければ何一つよくなつたわけでもなかつた。つまりは大名の私闘であつた。

將軍足利義政、初め子が無かつたので弟の義視を嗣とさだめ、大名の一人細川勝元を執事とした。しかるにその後嫡子義尙が生れたので、夫人は義尙を將軍に立てようとして、同じく大名の一人山名宗全にたよつた。同じころ、管領畠山、管領斯波の兩家にもそれぞれ相續争があつた。細川勝元も山名宗全も、この兩家の内輪喧嘩の片方づつに味方して張り合つた。勝元も

宗全も、將軍や管領に味方しておけば、勢力を張るのに都合がよかつたからである。細川勝元は丹波、攝津の領主、あつめし兵力十六萬。山名宗全は但馬の領主、ひつさげし兵力十一萬。双方とも諸國の大名が附隨してゐる。これだけの兵が他人の相續争のために放火亂闘に十一年を費した。

相續争——これは新しい争である。今までは遺産を子供にわけてゐた。このころから、長男が一人で相續するやうになつた。しかも、將軍や管領の持ち地たる莊園は室町時代に入つては、もはや安全な収入の源ではなかつたのである。

しばらく室町幕府の仕組を見るに、將軍の下に管領があり、その下に政所、問注所、侍所などの役所がある。そのまた下には、諸國に守護と地頭がある。地頭は莊園をあづかり年貢の取立を行ふ役目、守護は警備の任に當る。地頭は素腰の文官であり、守護は武士の頭目であつた。世が亂れると強い者が威ばりだす。將軍の威令が行はれなくなると、守護が地頭をおさへだした。武士の頭目が次第に權勢を張つて、年貢を領主たる公卿や將軍家にをさめなくなつた。かくて、守護の強い者は多くの地頭、群小守護、武士、浪人たちを統轄して世に大名と呼ばれる大武家となつた。地頭の中にもえらいのがあつて、あべこべに守護を支配し武士をあつめて、

やがて大名となるのもあつた。さうかと思ふと名もなき武士が、槍一筋度胸一つで、土地と武士とを統轄して大名で候とゐるのもあつた。のちに世に狂言の主人公とされて、馬鹿大名ぶりを大衆に嘲られるのも、このやうな立志傳中の大名があつたからである。應仁の大亂はこれらの諸大名を統べる將軍の無力を大名どもにまさまざと見せつけ、大名の擡頭する因をなした。何さま、浮世は變りはてた。將軍、室町にあつて天下の武士に號令するのではなくて、武士の頭目たる大名が權勢を張つて公卿、將軍何かあらんと威張つてゐる。その大名の家來のちには主人筋の大名を追ひ出してとつてかはる。室町時代にできた言葉の「下剋上」と云ふ流行語は、かかる世相を適確にあらはしてゐた。げに、下、上にかつての實狀であつた。これを少しく感傷的に云へば、王法佛法破滅の末世である。

大名細川勝元、大名山名宗全、互ひに上、將軍管領をしのいであばれまはつたあげく、將軍家の和ぼくをきつかけに、双方とも都から兵を引いた。文明九年十一月、山名宗全方の土岐成頼、將軍義視を奉じて美濃に歸り、敵方の昌山義統また大和に退いて、ここに應仁の大亂は終熄したが、それからあとが戰國時代である。諸國の大名、めいめいの領國で、民ををさめ兵を強ふし、互に隣國を攻めて、われこそ他日天下に號令せんものと期してゐる。

其二 將軍と大名

應仁の大亂が京都にをさまつた文明九年（二一三七）から、織田信長が安土城にうつつた天正四年（二二三六）までのおよそ百年間を、戰國時代とも呼び群雄割據時代とも呼ぶ。この時代区分は人によつてちがひ、天正十八年、秀吉天下を統一するまでを群雄割據時代とする史家もある。然し、この時代に安土桃山時代がつづくとするれば、信長安土城にうつれる年をもつてしばらくこの時代の終とするのも便利ではあるまいか。もちろん、現實の狀勢から云へば、群雄はまだ割據してをり、世はかりことも亂れてゐるのだ。

さて、この百年間、日本の有様はどのやうであつたか。

申すもおそれ多いことながら、皇室の式微はその極に達してゐた。御歴代は、後土御門天皇、後柏原天皇、後奈良天皇、正親町天皇の御四代うつりまし、攝關めんととして職をつぎ、公卿その位にあつて大政を輔翼し奉るといへども、政道すでにすたれて、征夷大將軍たる將軍職

6

7 もあつてなきがごとき有様であつた。

將軍は義政ののち、義尙、義種、義澄、義晴、義輝、義榮、義昭と七代までもつづいたが、歴代の將軍みな大名にたより、大名は勝手に將軍を擁立したり放逐したりした。

すでに將軍は大名のかいらいにすぎないのだから、政道を改め民心を安からしむるなどは望むべくもなかつた。その政治ぶりを見ればせいぜい徳政を濫發したり、一揆をおこさせたりするくらいのものであつた。徳政はもと借方である貧民を救ふための借金棒引であつたが、室町幕府末期には土民が幕府に徳政を迫つて一揆をおこすにいたつた。また將軍のぜいたく、幕府の失費をびぼうするための徳政令も出たことがあり、義政のごときはぜいたくの度がすぎて一代に十三回も徳政を發布した。

今、戰國時代の將軍がいかに大名にあやつられてゐたかを摘録すると次の通りである。

七代義尙（六代義政の長子）生母は日野富子、正室の出でないため後嗣問題がもめて細川、山名兩氏の争とからまり應仁の大亂の因をなす。延徳元年（二一四九）近江にのがれて死す、年二十五。

八代義直（義政の弟義親の子）義政の養嗣子となり畠山政長に擁立さる。政長と争へる細川

將軍と大名

政元に放逐され（九代義澄立つ）越前の朝倉氏に頼り、のち周防の大内義興に頼り細川高國にも援けられて義澄を逐ひ再び將軍となる。高國の横暴を憤りて阿波にのがれ、大永三年（二一八三）死す、年五十八。

九代義澄（義視の弟政知の二子）義直在職中に細川政元に擁立され、つひに將軍となる。義直に逐はれて備前岡山の九里氏に頼り永正八年（二一七一）岡山城中に死す、年三十二。

十代義晴（義澄の長子）細川高國に擁立さる。京都亂れて政令行はれざるを慨し、將軍職を子義輝にゆづりて引退す。亂を近江に避け天文十九年（二二一〇）死す、年四十。

十一代義輝（義晴の長子）管領（將軍輔佐の役）細川氏の臣三好長慶の横暴なるに抗争し、また、長慶の臣松永久秀の野望にも抗争し、つひに久秀に襲はれて二條の邸に自殺す、時に永祿八年（二二二五）年三十。

十二代義榮（義晴の弟義維の子）織田信長、義昭を擁して將軍たらしめんとするや戦はずして攝津にのがれ病死、永祿十一年、年二十九。

十三代義昭（義輝の弟）信長に將軍職を追はれたのちは、在職中から引きつづいて諸國大名に頼らうとして、一も成功しなかつた。

足利將軍もかうなつては目も當てられぬ。つまりは、下が上より強くなつた世の有様ではあるが、亂中また自から正あり、さまで亂れた世にも主従の間の美しさはあり、下は絶對に上へ服する武士の精神も脈々として傳はつてゐた。

應仁の大亂以後、信長京都に上つて國內統一の基を定めるまで、凡そ百年の間の日本全國は、このやうな二つの傾向のうちに、強者時に弱者を倒し互ひに領土の保全乃至擴張を争つてゐた。そして大大名の期するところは京都に上つて天下に號令するにあつた。この百年の間、戦争多かりしゆゑに戰國時代といふも、戰國の時代また自から平和の社會もあつて、商賣、娛樂、藝文の行はれた半面も見のがすことはできなかつた。

其三 群雄割據

戰國時代——これは少し物語風の時代名ではある。ある史家は、戰國時代、すなはち大名の勃興時代であるところから、のちの織田、豊臣、徳川による中央集權的封建制下の新武家時代に先行するとの意味で、戰國時代のことを中武家時代と呼んでゐる。また、ある史家は、この時代に、戦争、商業、海賊の三つにあらはれた民族全たいの勃興に重點を置いて、市民生活の黎明期となした。

いづれとするも、この百年間に、諸國の大名が覇を争つた、戦争と外交の歴史は史上の一壯觀である。しかも、わが織田信長は、これら大名の一でさへもなかつた。大名の下につく一被官の身をもつて、つひに天下の英雄豪傑を統御するにいたつたのであるから、ここにしばらく信長出づるまでの大名たちの勢力分布を概観しておくとしよう。

10

戰國時代に戦つた主人公は群雄である。群雄とはそも何であらう。この時代に日本全國に割

11

據してゐた大名、豪族は大變な數にのぼる。大名はたいてい室町幕府によつて諸國に置かれたる守護職であつた。彼等はめいめいの任國において政治的にも經濟的にも權力を確立し、さながらめいめいの領土のやうに取り込んで了つた。その領主がのちに大名となるのであるが、この時代には領主、中格式の高い者を大名と呼んでゐた。いはゆる群雄とは大名格の領主を總括したものだと思つて差支ない。

然らば群雄の顔ぶれはどのやうなものであつたらうか。百年もの間には代替りもあり、勢力の消長もあつたことゆゑ、ここには織田信長の生れたころ、即ち應仁の大亂から凡そ五十年をへだてた天文、弘治ごろ（二一九〇年代から二二一〇年代まで）の群雄を大觀することとしよう。

據 割 雄 群

先づ足利將軍は十代義晴、京都の亂を避けて江州にのがれ、京都市中は細川、三好、佐々木諸氏交戦のちまたとなつた。しかも、細川氏の權は家臣三好氏にうつり、三好長慶は主人細川晴元を追うた。その長慶が死ぬと今度は三好氏の家臣松永久秀が長慶の嗣子義繼を無視して權勢をふるひ、更に十一代將軍義輝を攻めて自殺せしめた。

播州、備前、美作には赤松氏が父祖の勢威をついで領主となつてゐたが、この時代に内訌を

起し家臣浦上氏に備前、美作を奪はれた。その浦上氏ものに家臣宇喜多氏の勢力に壓倒され備前を争亂のちまたとされるにいたつた。

中國筋では大内氏、周防國大内に起つて義興の時代となり、中國九州を平定したが、その子義隆は老臣陶晴賢に攻められて自殺した。而して陶晴賢は義隆の臣毛利元就に破られた。毛利元就は、つひに大内氏の全勢力の後継者となつた。

山陰では尼子氏。今、經久に至つて南下して美作にまで伸びたるも毛利氏に阻まれた。

九州には日向の伊東氏と薩摩の島津氏とが雄視してゐる。

四國では土佐の長曾我部氏最も強く、あとの三國は細川、三好の殘黨の争地となつてゐた。

近江に争ふは六角氏と京極氏。京極氏の臣淺井氏、江北の地を奪ひ、やがて近江の大半を領した。

越前は斯波氏三家老の一、朝倉氏が斯波氏に代つて領有するところとなつた。斯波氏は足利氏より出で、足利將軍家の管領たり、越前、尾張、遠江等を領し、朝倉、織田、甲斐諸氏それぞれ守護代として任國にあつた。足利將軍衰ふるや斯波氏また任國に勢威を失ひ、守護代に國をとられたのである。加賀は一向宗一揆のために占領されてゐた。

美濃は土岐氏守護職たるの地であつたが、臣齋藤氏權を專にし、その執事長井氏が齋藤氏の權をうばつた。長井氏の臣西村氏主人筋をだんだん上へとつちめて行き、つひに齋藤氏を名乗つて齋藤道三と名乗る怪物が美濃一國を領してゐた。

尾張は斯波氏守護職たるの地、ここに守護代として織田氏があつた。織田氏は二流あり、一は清洲城に據つて下四郡を領し、一は岩倉城にあつて上四郡を領した。清洲流織田氏の家老にして三奉行の一人たる織田信秀(信長の父)が、つひに兩織田家を凌ぎ、更に斯波氏を壓倒して威勢全尾張に及ばんとしてゐる。

三河では吉良氏すでに衰へて松本氏起り、その他の東海道筋では駿河の守護たる今川氏最も勢力あり、京師をのぞんで虎視眈々たり。關東は北條氏、甲斐は武田氏、奥州は伊達氏、いづれも威望四隣を壓した。これらの群雄は互ひに、外交と戦争とによつて領土を守り、または攻めてゐた。外交といつても生やさしいものではなかつた。堂々と政治的な同盟を結ぶこともあらず、子供を人質にやる場合もある、時には家族のうちのみめ美はしい娘を政略的に結婚させることも珍らしくなかつた。このやうにして、群雄中の大なる者は、機を得て必ず京師にのぼり、天皇をいただいて天下に號令しようと志してゐた。

其四 尊皇思想

天皇をいただいて天下に號令する——これは戰國時代の群雄の理想であり得た。群雄中の何者がいかにそれを表現したかを一人々々について説き明かすことはできないが、織田信長がその最も顯著なるものとして史上にあらはれてゐることは申すまでもない。而して、信長の信じ且つ行つたほどのことは、戰國時代の群雄が抱懐してゐたところであつた。

戰國時代の群雄に尊皇思想があつたことは、その時代の「戰國」であつた半面から考へると疑はしく思はれるけれども、實は「戰國」なればこそ尊皇であり得たのである。即ち、足利將軍の權勢が地に墮ちて、人臣としての統率上の力が無くなると、それにかはるべき權力が、いかに、何をなすべきやの道が當然考へられるのであつて、その指針はすでに明らかに歴史と道理の上から教へられてをり、ある程度は戰國時代の國民思想ともなつてかもし出されてゐたのである。

戰國時代のはじまり、即ち應仁の大亂の終つたのは建武中興をへだたること百四十三であり、いはば戰國時代の近世史たり、少しく大まかに考へれば現代史上のことである。而して、建武中興がいかなるものであつたかは、戰國時代にはもはや文學作品として傳へられ、支配階級の間には理解されてゐた。また一ばん民衆の間には、當時漸くひろまつてゐた謡曲や狂言の内容として「尊皇」とまではつきりいへないとしても、わが國の國體を知らせ、日本人がいかなるものであらねばならぬかを教へてゐたのである。

支配階級とはわれながら妙な用語だけれど、つまりは、當時の大名乃至高級の武士、それから思想的には僧侶神官も加はるのであるが、それらの人々の間には、尊皇の大義は多かれ少かれ理解されてゐたのである。そして、思想として明白に説いたものは吉田家の唯一神道であつた。

尊皇思想 吉田家の唯一神道は吉田兼俱によつて文明年間にひろめられた。吉田家は即ち卜部氏の出であり、卜部氏は鎌倉時代から日本書紀の研究であらはれてゐる。兼俱もその姓を卜部氏として傳へられ、卜部兼俱ともいふ。この人の説いた神道は、その主著「名法要集」に「神とは天地萬物の靈宗なり」、「道とは一切萬行の起源なり」などとあるやうに、記、紀の史實を超えて更

に哲學的に考察されたものであるが、もとより日本民族としての考へ方にあやまりなきを期してをり、天照大神をいつきまつり、清淨の心境をたつとび、尊皇護國のことはりを教へてゐる。それをひろめ出したのが文明年間、即ち、應仁二年につづく十八年ばかりの間であるから、世は対ともと亂れてゐる最中であつた。どのやうにしてひろめたかといふと、先づ「三社託宣」といふことを提唱した。即ち信仰の對象を

八幡大菩薩

天照皇大神宮

春日大明神

と三つならべた。中央の主神たる天照皇大神宮はもとより萬代、億兆の尊崇するところ、これに配するに武家の守護神たる八幡神と、攝關家たる藤原氏の祖神たる春日神とを以てしたるは、戰國時代の宗教心を高揚するのに大いに効果があつたのである。これら三社の御託宣は倫理的なものであつて言葉の上に尊皇とか愛國とかいふことは現はしてないが、中央の天照皇大神宮を尊崇することは、やがて「日本は神國也」といふ言葉にはじまる「神皇正統記」の精神であり、人皇しろしめたまふ國柄についての自覺をうながす大なる力となつてゐたのである。

もちろん、亂世のこととて無學の武士、町人が時に大不敬の振舞もあつた。たとへば禁裏近くに茶店を出す者などもあつた。然し、群雄もとより文學あり、足利將軍家衰へて、皇室の式微をもちへりみざることに對しては心を痛めてゐたのであつて、例へば大内義隆、毛利元就、上杉謙信、大友宗麟など、いづれも皇室に金銀を獻納してゐる。ことに上杉謙信のごときは、天文二十二年（二二一三）信長二十歳）上洛して後奈良天皇を拜し、禍亂後の平和克復に關する勅諭を賜はつた。ついで永祿二年（二二一九）信長二十四歳、桶狭間戰の三年前）再び上洛して正親町天皇を拜し、金銀を奉りて歡慮を安んじ奉つた。

後奈良天皇の御代（二一八七—二二一七）紫宸殿の御築地がやぶれて、三條の橋のほとりから内侍所の御あかしの光が見え、また紫宸殿前には茶を煎て賣る者が店を出してゐた。

後奈良天皇の御代は即ち將軍義輝の在位中であり、京都は細川氏の臣三好長慶の威をふるつてゐた頃である。上杉謙信が拜謝をゆるされたのはこのやうな時代であるから、のちに金銀を奉獻したのも眞に式微のほど見るにしのびなかつたのであらう。

大内義隆の尊皇については、一ばんの國史ではあまり注意されてゐないが、彼は後奈良天皇（二一八六—二二一七）が連年の兵亂にて御即位の大禮をいまだ擧げさせ給はぬことをなげき

天文四年その資を進獻した。これによつて御即位の大典は翌五年二月に舉行されたのである。これらの例に見るやうに、戦國時代の群雄中、皇室に思を寄せ、天皇中心の政治を期してゐたものは一、二にとどまらぬのであつて、織田信長は、むしろおくれて入浴し、つひにその赤誠をいたしたるものであつた。

其五 群雄の政治

戦國時代の群雄といへば、いかにも武張つたことばかりを聯想し易いのであるが、各自の領國において富國強兵の實を擧げるためには、それぞれの國內で産業を發達させ、善政を布いて人心を統べなければならなかつた。されば、戦國時代、即ち國々における善政時代であり、善政を念とするにあらすんば群雄の一員たり得なかつたのである。

群雄の内治ぶりを一つ一つについて語るのも反つて煩はしいことであるから、のちにその代表的なもの二、三を語るとして、先づ戦國時代の産業、貿易などの有様を大觀しておかう。即ち、亂世における静かな半面を見るのである。

戦國時代の最も顯著なる特長は、大名が領國の政治經濟の中心地の一つの大きな城廓を構へて、その周圍に家臣を住まはせ、更にその外廓に商工業者を集め住まはせてこれを保護し、もつて國力の充實をはかつたことである。いはゆる城下町はこのやうにして諸國に發生し、發

達したのである。

商業は従来、市において営まれた。市には方々の商人が集まつて、物資を交換した。そのために、商人がめいめいの店を出す「座」をきめてゐた。座は、一定の商品を販賣する座席である。「座」が並んで「市」をつくつてゐたわけである。

この「座」の集まる「市」による商業が戦國時代に入つて城下町にまとめられたのである。大名は商人たちに保護と特典とをあたへて、城下町に住むことを奨励した。城下町の商人は重税に苦しめられることなく、また座や市の制時にわづらはされることなく、自由に、平和のうちに安んじて營業することができた。

商人はまた、戦國時代以前には諸國の所々に設けられたる關所のために、運輸交通を妨げられてゐた。鎌倉時代後期から、行商人は關所を通るごとにわづかなながらも關錢を支拂はされてゐたのである。戦國時代に入ると、大名たちは領内の關所を一切とりのぞいた。領境の關所はのこされた。

商業は鎌倉、室町時代を通じて多くは物々交換であり、それ以前から支那の貨幣は國內に入つてゐたけれども、いまだひろく流通するにはいたらなかつた。戦國時代に入ると、それぞれ

の領國內において貨幣が流通するやうになり、ある國々では貨幣が鑄造されたが、多くは支那(戦國時代は明)から輸入されたる銅錢が用ひられた。領内で造る錢は素質が悪いのが多かつたので、そんなのを鏹(びた)錢と呼び、金扁に悪の字をつけた新字が作られたくらゐである。

産業のうちでは製鹽業が發達し、戦國大名はたいいてい製鹽を奨励した。次では、金、銀、銅、鐵などの採掘がさかんになつた。金銀は細工用のほかは支那との貿易の支拂にあてられた。従つて「金ほり」なる勞働者ができた。戦國時代の戦争では攻城軍がこの「金ほり」を集めて坑道をうがち城に迫つたこともある。のちに家康が大坂城を攻める時、金ほりに坑道を掘らせて城をひつくりかへらせるぞと、淀君をおどかしたくらゐである。鑛山採掘の技術も戦國時代に入つて大に進歩した。

手工業では刀劍の製産がさかんになつた。支那に多く輸出するやうになつて、いよいよ多量の刀劍が造られた。従つて注文打のほかに、數打と稱する數でこなすやうな造り方もあつた。そのため、輸出向の刀劍は、だんだん値段が下つた。

このほか、織物、細工物などがさかんになり、技術も大に進んでゐた。但し、平安朝時代にあつた高級の織物技術は、戦國時代には退歩してゐる。

だいたい、以上のごとき有様で、國內産業は戰國時代といへども決して衰へてはゐなかつたのである。而して、それは大名の保護、獎勵のあつたためであることは申すまでもない。

そこで、これらの國內經濟情勢を念頭において、戰國大名の政治ぶりを見るとすれば、その代表的なものとして、やはり越後の上杉謙信の政治ぶりをうかがふべきであらう。

彼は戰國亂世の間にあつて、領民に對し極力仁徳をもつてのぞんだ。早魃や飢饉に際しては、窮民に米麥をわかちあたへ、または租税を免じた。酷吏の良民を虐げることがを防ぐためには、領國見廻頭二人を常置して民情を視察せしめた。

經濟政策はつとめて緊縮、節約を旨とし、謙信自から常時黒綿服を着て範を示した。同時に徴税の仕方も行き届いてをり、清酒役、濁酒役、麴役、茶役、藥役、馬方役、船頭役、鐵役などの名目で租税をとり立てた。

産業の振興には最も意を用ひ、開墾、植林、鑛山開發に力を入れた。紀伊の根來及び能登から塗物師を招き寄せて領内で逸品をつくらせ、また越後特産の青苧の販賣に留意した。製鹽を獎勵し諸國に賣りひろめることに力を用ひたことも有名である。甲斐の武田氏と戦つてゐる間に敵に鹽を送つたのは有名であるが、金を取つてゐたとすれば、あの戰爭中に敵から金までし

ほつてゐたことになる。戰爭で鹽が賣れなくなることは上杉謙信の欲せざるところであつた。

交通の整備にも努力し、居城たる春日山城を中心として諸方に通する道路をつくり、宿驛、

問屋、飛脚、傳馬などの制を設けた。

其六 貿易と倭寇

足利時代に入つて倭寇の明國を襲ふこといよいよ猛烈となつた。義滿將軍、明に迎合してこれを禁じたるも、のち更に猖獗となり、時には明の海賊が手引して、ともに亂暴を働いた。よつて日本からは勘合貿易船を出し、政府公認の割符を持つた船のみに貿易せしめることとしたが、それも應永年間（二〇五四―八七）に中絶された。

四代將軍義教にいたり勘合貿易は再興されて、應仁の大亂中にも幕府、大内氏、細川氏、相國寺（義滿創設、京都五山の一、臨濟宗本山）等の船が明に往來してをり、そののち、戰國時代を通じて、天文十八年（二二〇九―信長十六歲）まで前後六回入明してゐる。すべて朝廷、幕府、細川氏、大内氏等の船で、毎回三隻乃至六隻の船が廻航してゐる。大内、細川兩氏は勘合の獲得について互に競争した。明からはこの間一回だけ日本に使節を派した。日本からの貿易船は末期には博多や堺の商人が船一艘につき何千貫文といふ大金で請負つてゐた。船一隻に

は職員十五人、水手五十八人、從商人百十二人乗つたのもあるから、その大きさを凡そ想像し得るであらう。天文十六年（二二〇七―信長十四歲）に就航した船の一つは長さ二十三尋、櫓の長さ十三尋であつた。貿易船の出帆地は當初、兵庫または博多を起點として寧波に向つたが、戰國時代には堺を起點として瀬戸内海を経由する中國路と、四國の南方から薩摩の坊津を経て入明する南海路とがあり、行先はいづれも寧波であつた。

日本からの主要輸出品は刀劍、硫黃、銅、扇、蘇芳木（染料）、蒔繪物、屏風、硯等であつた。刀劍は最も珍重されてゐた。毎回少きは三千把（一把はいくつかを束ねたもの）多い時は三萬七千餘把の刀劍を賣り込んでゐた。應仁の亂前、義教の時代から義晴の時代にかけて恐らく二十萬把見當が明に輸出されたやうである。刀劍の價は初め一把一萬文、のち下落して一干文になつた。

このほかに貢獻方物、使臣自進物、國王附搭品等として太刀、槍、長刀、扇、蒔繪物、銅、硫黃等が送られてゐた。

寇倭と貿易

明からの輸入品では、銅錢が第一位にあつた。日本の勘合貿易は銅錢獲得を主たる目的としてをり、これを國內で流通せしめたのである。輸入品として以外に、貿易品に支拂はれる代價

としても多量の銅錢を獲得してゐた。次には書籍が多かつた。また、唐、五代、宋、元などの名畫の輸入も莫大な額にのぼつてゐる。このほか、生絲、絹織物、漆器などもあつた。

このやうに、輸入品は銅錢以外は貴族や大名などの生活を充實させ且つ華やかにいろどるに役立つばかりであつた。信長は近隣の大名に外交政策として豪華な舶來品の贈物をしてゐるが、この時代の外國貿易がさかんであつたことと考へ合せて、その持物の豪奢であつたこともうかがはれる。

26 以上は勘合符を得て公に行つてゐた貿易のことであるが、このほかに大名や商人が私に行つてゐた貿易があり、また、明の當局に私貿易を阻まれて倭寇に居直つた者も少くなかつた。但し、戦國時代の倭寇は商人が轉向したのはむしろ少数で、多くは亂世の武士が大志を大陸に伸べて往々にして狼藉に及んだのであり、更にそれを手引し、その仲間に投じたる明人の徒黨も交つてゐた。戦國時代の倭寇で最も凄まじかつたのは、天文二十二年（二二二一—三—信長二十歳）五月、明人王直によつてひきゐられたる一隊で、船數三十七隻、明の官兵を破つて内地深く荒れまはつた。翌年も、翌々年もこの活躍はつづけられた。明國は、かく連年倭寇に悩まされてゐたが、世宗の嘉靖四十六年（紀元二二二二—三—十一代將軍義輝—信長三十歳）福建に大いに

倭寇を破つて、からくもその暴威を抑へることができた。當時の倭寇の船の中には龍宮船と稱する一種の潜水艦が活躍してゐた。

幕府が勘合符を大名や商人に與へて公の貿易をさせてゐたことは前述の通りであるが、幕府の權勢が衰へると、勘合符を與へる特權は大内氏の手につつた。大内氏は周防より起りてつひに中國、九州に勢威をふるひ、海上の實權をにぎり、その手下には倭寇が多かつた。

戦國時代の中ごろは即ち大内義興の權をにぎれる時であつた。彼は永正八年（二一七一）僧桂悟を正使として、六百人を明國に赴かせたが、その時の商品は多くは太刀であつた。一口千八百文の價を、明國で三百文に値切つたので、僧侶ながら桂悟は書を明國の大官に送つて、その不當を難詰したので、明國も屈して三百文よりも高い値で買ひ取つた。

大内氏は、このやうに明との貿易に優先權を持つてゐたこととて、その富力もすばらしく、大内氏の居館のある山口は戦國時代に「西の京」と呼ばれてゐたから、殷賑をきはめてゐた。

其七 鐵砲と耶蘇教

戰國時代の日本は、鐵砲（當時は「鐵炮」と書いた）と耶蘇教とを通じて西洋と接觸した。西洋の、これら二つの文化の産物を日本に傳へた國はポルトガルであつた。

ポルトガル人は皇紀二千百年代、即ち應仁の大亂後間もなく、喜望峯を發見し、印度航路を發見し、最初の世界周航を成しとげた。これら先驅者の事業によつてポルトガルは東洋に植民地を開拓するやうになり、太平洋上においてスペインと衝突した。そこでローマ法皇がスペインとポルトガルとの活躍區域をわち定め、それによつてスペインはアメリカ大陸とフィリピン諸島に、ポルトガルは太平洋方面と新大陸中のブラジルに發展することとなつた。

ポルトガルは太平洋の植民地獲得の根據地として印度のゴアに占據した。ゴアから東進してマカオに到り、更に日本に来て通商を求めたのは皇紀二千二百三年、即ち天文十二年、信長十歳の年である。かくて、平戸は日本とポルトガルの通商港となつた。

この年、天文十二年の八月二十五日、大隅の南方にある種子島に、いつこの國人ともわからない百餘人の乗組員を載せた船が一艘漂着した。幸ひその中に明國の儒生で五峰と云ふ者がゐたので、村役人の織部亟が杖で砂上に筆談を交して、西南の蠻種の商人たちであることがわかつた。この五峰は實は明國の海賊王直で、日本の倭寇の巨魁となつてゐた。今、種子島に漂着した船も王直即ち五峰の持ち船で、乗つてゐるポルトガル人は支那に貿易に来て内輪喧嘩をしたため船主に置き去りにされたのを、王直の海賊船に救はれて載せてもらつたのであつた。王直は當時五島を根據地として、日本とシヤム及び南洋方面との間の貿易をしてゐたのである。

ところが、その載せてもらつた王直の海賊船が難船して、やつと漂着した島が種子島だつたと云ふわけである。或は、王直の方がポルトガル人の船に乗つて種子島に漂着したのだとの説もあるが、ここには、ポルトガル人ピントの「廻國記」にしたがつて（洞富雄氏著「鐵砲傳來記」による）その話をとることにした。

さて、この南蠻の商人即ちポルトガル人どもは、右の村役人織部亟に教へられて、島主の種子島惠時及びその一族時堯に會つた。この時南蠻人が二、三尺の、えたいの知れぬ長い物を持つてゐた。見てゐると、その男が狙を定めて的を撃つた。その發するや電光の如く、その鳴る

や雷かみなりの轟とどろくが如く聞く者耳みみを掩おほはざるはなかつた。種子島時堯ときたか、大いに珍めづらしがり莫大なる代償だいじやうを支拂たつて二挺買かひ入れた。このことを紀州根來寺の杉坊すぎのぼなるものが傳つたへ聞いて、その年の内に種子島に出かけ、その一挺ひとつをゆづり受けた。紀州根來寺と云ふのは新義眞言宗の道場であつて、寺領じりやう七十二萬石、堂々たる大名並なまであつた。高野山金剛峰寺こうのやまこんごうぶつじの一派いっぺに對抗たいかうしてゐたおそろしく鬭争たうそう的な宗團である。論争ろんそうにも戦争にも強く、後年、秀吉にほろぼされて堂宇どううを悉く焼やかれた。

種子島では翌、天文十三年に鐵砲てつぱうの製法せいほうをポルトガル人から習まなつて、これを造つくることに成功した。その製法は天文二十三年につづく弘治年間(三年まで)には早はやくも九州各地、和泉の堺さかいなどに弘ひろまつてゐた。

また、ポルトガル人の鐵砲てつぱうは、その後も商品として九州の各地に直接傳つたへられ、その製法も傳つたへられてゐたから、鐵砲は急速きゆうそくに各大名の領國にひろまつてゐた。

本州ほんしゆの大名たちは堺の鐵砲商から自由じゆに仕入れることができた。堺は當時、いづれの大名からも保護を受けない、商人の自由都市であつたから、儲もちけになれば何挺なんていでも造つくつて賣うつたのである。時の足利將軍義輝よしかげも、天文十八年に書しよを種子島時堯ときたかに送おくつて火藥くわんやくの製法を問とうてゐる。

織田信長が鐵砲を手に入れたのは天文十八年、彼がいまだ十六歳の時であつた。彼はこの年近江國の國友村なる鐵砲製造業者から六匁玉鐵砲むむつたまてつぱう百挺ひゃくていを買かひ入れたのではないかとの説うたもあるが、國友村のある近江國は當時たうじ淺井久政の全盛時代であつたから、迂濶うくわくに信長に對し大量の鐵砲は賣うらせなかつたであらうとの説もある。いづれにしても信長の手元てもとに五百挺の鐵砲のあつたことは事實である。國友村は後年徳川幕府の鐵砲製造をほとんど一手いっしゆに引受けてゐた。

信長がこの年、夫人ふじんの父に當る美濃の齋藤山城守と尾張の富田で會見したことはのちにも記しるすが、その時信長は召めしつれたる兵卒へいそのうちに、この五百挺の鐵砲隊をも加はらしめてゐる。

鐵砲傳來てつぱうでんらいのことはこれくらゐにして、次に、戰國時代に、西洋から傳はつた耶蘇教イエス教について語かたるとしよう。

キリスト教キリスト教は中世紀に猛烈もうれつに墮落だらくした。牧師の私行上の墮落は記すもヘンのけがれである。免罪符めんざいごがいくらでも賣れてゐたのだから、買ふ者の迷信めいしんよりも、賣る者の悪度胸あくどきうや呪のろふべきものであつた。而して賣らせる本元ほんもとはローマ法皇であつた。法皇の權威けんいは當時ヨーロッパを壓おさしてゐたのである。

そこで、つひに宗教改革が起りルーテルを先驅者せんくしやとして新教の多くの闘士たうしと殉教者が出た。

新教徒の信仰は神に聴かれて、流石にローマ法皇も今までの悪行を反省せざるを得なくなつた。多分そのことでお祈もしたことであらう。やがて新教の勃興に對し、ローマ法皇に服従する舊教徒の自虐があり、その運動が凝つて一つの宗教團體となつた。それがスペイン人イグナチウス・ロヨラ主唱するところのイエスの會、またはゼスイツト（イエスの會の徒）と呼ばれるものである。ゼスイツトは嚴格なる教育と訓練とを受けて各國に派遣された。その一人が聖ザヴィエルであつた。

ザヴィエルはスペインの貴族である。ロヨラはザヴィエルを印度のポルトガル植民地に派遣し、東方の人々に傳道することを命じた。ザヴィエルは皇紀二千二百二年（信長九歳）に印度のゴアに着いた。時に年三十六。彼は更にマレー半島南西岸の貿易港として榮えてゐたマラツカに着いた。

マラツカで、ポルトガル商人の同伴せる日本人彌次郎に會つた。彌次郎、または薩摩人安次郎とも傳へられてゐる。かねて佛道に精進して西と名乗つてゐたが、喧嘩で人を殺して、國にゐられなくなり、ポルトガル人の船に載せてもらつてマラツカに渡つた。彼はザヴィエルに會ふと互ひに信頼し合ふ仲となり、ポルトガル語を學び、且つ、キリスト教のあらましを會得

した。佛敎を學んでゐたので話はよくわかつた。彼の勸説によつてザヴィエルは二人の傳道師を伴ひ天文十八年（信長十六歳）鹿兒島に着いた。領主島津貴久は、はじめの間は海外貿易の因縁をつくるためにザヴィエルを厚遇したが、のちにザヴィエルは傳道のために來たことがわかり厚遇しなくなつた。

ザヴィエルは鹿兒島で、安次郎の譯した「原理問答」によつて百餘人の信者をつくつた。そこを去つて平戸に到り、領主松浦氏に優待され、且つ布教をゆるされた。ここでも、忽ちの間に多くの信者をつくつた。次で山口に行きたるも、當時山口は貿易の利によつて、華美浮薄の都となつてゐたので、市民はザヴィエルから福音を聞くことを欲しなかつた。よつて彼は更に京都に向つた。

京都は混亂の渦中であり、將軍義輝の威力も行はれてゐない有様なので、再び山口に歸つて日本皇室に進獻するつもりで持つて來た遠眼鏡、樂器、美服、火繩銃、時計などを領主大内氏に贈り、布教の自由を與へられた。そこで三千餘人の信者に洗禮を授けた。

かくて、ザヴィエルは、天文二十年、日本を去つて印度に歸る途中、翌年支那で客死した。信長と耶蘇敎については、のちに「文化史上の織田信長」のくだりに再説する。

第二章

起

其一 幼少年時代

さて、これより、いよいよ織田信長の本傳に入ることとしよう。

織田信長は天文三年五月、尾張國古渡に生れた。今、名古屋市中區古渡となつてゐる。系圖の上では父信秀の二男である。兄信廣については多くは傳はつてゐない。妾腹の出なので二男信長があとをついだ。母についても詳でない。家系は平重盛から出てゐると云ふのも傳説にすぎない。ただ、信秀が尾張の經營に努力してゐたことは事實である。

信秀は信定の子である。信定についても傳はるところ乏しいが、織田家が足利氏三管領の一たる斯波氏の家老で、もと越前に住み、のち斯波氏の領國尾張に居付いたことは確である。

文明年間、尾張の上四郡は織田信定が領した。下四郡は斯波氏の一族斯波義達が領有し、織田大和守が守護役となつてゐたが、のちに、織田氏の同族三人が三奉行となつて政を行つた。その三奉行の一人は信定の子の信秀であつた。信秀の勢力が次第にさかんとなり、名古屋城に

本據を置き、古渡にも城を構へた。そのお城で信長が生れたのである。

信秀は天文十一年八月、駿河に根城をかまへてゐた今川義元と、三河の小豆城に戦つて勝ちまた、美濃の齋藤道三と戦つて勝つたり負けたりしてゐた。然し結局、齋藤道三と和睦して、その女を信長の妻とした。信秀はまた勤皇の志あつて、天文十二年には内裏四面の築地を修理するために四千貫文を朝廷に獻じた。伊勢外宮の造営にも力をつくした。このやうに勤皇、外交、戦争と、いろいろの方面に心を用ひてゐたので、ある歴史家は、父の信秀は子の信長の縮圖だとまで評してゐる。彼は天文二十年三月三日に死んだ。年四十二。子の信長は、その時十八歳であつた。

信長の少青年時代については詳しいことがわかつてゐない。天文十三年、十一歳で元服して三郎信長と稱した。凡そこの時分の信長のことについては「信長公記」に天澤と云ふ僧の話がある。天澤は信長の居城清洲城から五十町ばかり東に當る天台宗天永寺にゐた僧侶である。ある年、甲斐の國を過ぎると武田信玄のもとに挨拶に立ちよつた。その時は信長が永祿三年、二十七歳にして桶狭間に今川義元を討つたのちのことであるが、然し、この時に天澤の語つた「信長觀」は信長が義元を討つ以前からの生活ぶりを見聞したところによつてゐる。故に凡そ

二十代ごろの青年信長について語つたものとして受け入れてよろしい。さて、信玄が信長について尋ねるままに、天澤が信長の生活と性格とについて話した。

その話によると、信長は毎朝馬の稽古をした。鐵砲は橋本一巴を師として練習した。弓は市川大介について稽古した。平常は平田三位と云ふ者がついてゐて何かと武道や兵法について教授したらしい。また鷹狩が好きでたびたび鷹野に出かけてゐた。武張つたこと以外のことでは舞と小唄が好きであつた。清洲の町人に友閑と云ふ者がゐて、舞を教へた。信長は「敦盛」を一番だけしか舞はない。「人間五十年、化轉の内をくらぶれば、夢幻のごとく也」と唄ひながら舞ふのがいつものことであつた。また小唄を口ずさむことも好きであつた。一ばんよく唄ふ小唄は「死なうは一定、しのび草には何をしよぞ、一定かたりおこすよの」と云ふのであつた。信玄、この話に興がり、天澤にせがんで、信長の歌ふ通りの節で真似をさせた。そして尙ほも鷹野のことについて聞きたがるので、天澤が語りついで云つたことには、鷹野の時には鳥見の衆二十人ばかりがついて行き、これらの者が信長より先に二里も三里も出ばつて行つて、どこその村在所に鷹がをります、鶴がをります、などと注進する。それからまた、鷹野における信長の身邊には、六人衆と云つて、弓三人、槍三人の近侍を侍らせてゐた。信長自身もなかな

が鷹を放つことが上手で、鳥のゐるそばまで鳥に見られるやうに馬に身を伏せて忍び寄り、巧に鳥を捕へた。以上が天澤の信玄に語つた信長についての話である。

信長は武術には身を入れたが、平素の行は粗放で人並はずれてゐた。「眞書太閤記」によると、十五歳の時から異風を好むやうになり「行も世の常ならず、かりそめの往來にも馬上にて市中の菓子をとらせてくらふ」とある。父の信秀の葬儀の席に、髪を茶せんに巻き立て、袴も着けず、長柄の太刀脇差を注連繩にて捲いてゐた。焼香の順番が來ると、抹香をくわつと引つつかんで佛前に投げかけた。弟の勘十郎は肩衣に袴を着けて、禮儀正しく焼香した。みなみな信長の振舞には眉をひそめたが、席に列なつてゐた筑紫の客僧は、信長のことを、あれこそ國を持つ人よ、と評した。

信長ある時、竹槍にて叩き合ふ競技を見て、槍は長いにかぎるとなし、三間柄、三間々中柄などの長槍をつくらせた。粗暴の半面、このやうな工風もこらしてゐたのである。

40 どちらがほんとうの信長であるかは傳たる平手政秀にさへわからなかつた。政秀はいくたびか諫言したが、信長の粗暴は止まなかつた。そこで政秀は、天文二十二年正月、信長の粗暴をいさめる諫狀をのこし、切腹して果てた。信長いたくかなしみ、政秀のために政秀寺を建てて

その菩提を弔つた。

政秀の諫死したのちも信長の異装好みは止まなかつた。信長は四隣の強敵の目をくらすために、わざと異様の服装をし、粗暴の行動に出でたのだとの説もあるが、四隣の諸豪も信長のいかなる人物であるかについては疑問をいだいてゐた。わけても信長の舅にあたる齋藤道三は政略的に女をめあはせたものの、信長の人となりについては明白に知るところがなかつたので政秀諫死の三月のちの四月、美濃と尾張との中間にある富田の正徳寺にて信長と會見することにした。

信長はこの機會を活用した。彼は萌黄色の平打にて髪を茶せんに巻き立て、かたびらの袖をばづし、腰のまはりにはその頃の猿廻しのやうに火うち袋を下げ瓢箪を七つ八つぶら下げた。そして、虎の革、豹の革、四つかはりの半袴を着けた。このやうないでたちで、軍兵の行列そろへて富田に向つたのであるが、その行列は、先一番に鐵砲五百挺、左右二行に行進させ、次には三間柄の朱槍五百本、その次に歩行の兵百餘人いづれも赤装束である。そのあとから信長太くたくましき馬にまたがり、ゆらりゆらりと打たせたり。

齋藤道三は正徳寺に先着してゐたが、富田の町中のある民家に身をひそめ、障子の隙間か

ら信長を見て、噂の通りの異装ぶりに早くも信長を輕蔑した。近道を寺に歸つて控の間で待つてゐる。このくだりすべて「信長公記」や「眞書太閤記」によるのだが、どうも齋藤道三ともあらう者が民家の障子の隙間から信長を見るなどは小説めいてゐる。然し、信長が道三の意表に出たことを知るには右の隙見が前提にならないと話の辻褄が合はない。さても道三が威儀を正して座敷に出て見ると、信長はすでに控の間で衣服を改めて威儀を正してゐたが、柱にもたれて、道三が座敷にあらはれたのを見向きもしない。家來が見かねて注意すると、始めて道三の方に向き「先ほど障子の隙から見てゐた者に似てゐられるので挨拶にも及ばず候ひしなり」と云つたと云ふのだが、こんな細部にわたり事實をせんさくするまでもない。ただ、この日の會見が終始信長の機略によつて道三を壓し通したことを想察すれば足る。道三は信長に氣負けたわけであるが、その奇言奇行の間に信長の眞價を洞察することはあやまらなかつた。信長とわかれてから、猪子兵介と云ふ者が道三に「何を見候も上總介（信長）はたわけにて候」と云ふと、道三が答へた、「されば無念なることにて候。山城（道三）が子供（女のむこなれば子供と云つた）たわけの門外に馬をつなぐべきこと、案の内に候」。門に馬をつなぐとは當時の用語で、人の臣僕となることであつた。

其二 尾張經營

信長の父信秀は生前、足利將軍家の管領たり、且つは尾張の守護たる斯波氏をも、また同族たり且つは織田氏の宗家たる人々をも凌いで勢威を尾張一國にふるつてゐた。されば信秀亡きあとの同族たる織田氏は、いづれも信長の代には頭ををさへてやらうと計略をすすめてゐた。信長はをとなしくしてゐると危なかつた。機先を制することは信長の得意の兵法であつた。彼は血縁につながる同族をつぎつぎに、機會をつくつてはほろぼした。それは信長としては、他の大志をのべる基礎工事であつたのだから、本來ならば詳説すべきであるが、とてもややこしい因果關係がつづいてゐるので、ここには、あらましを年代表にして要記しておかう。

天文二十一年（信長十九歳）八月、松葉、深田（共に今の海部郡にあり）の織田氏を討つ。また父信秀の殊遇を受けてゐた山口教經が信長の敵たるべき今川義元に降り、尾張を掠めんとしたので、信長は謀をもつて義元をして教經の有力なる武將を殺さしめ、その力をくち

いた。

弘治元年（信長二十二歳）四月、織田氏の宗家たる清洲城主織田信友が、主人筋たる守護の斯波氏に對し叛意を抱いてゐたので、信長は斯波氏をかばひ、守護家を助けるを名として、宗家の織田信友をほろぼした。そして自分が代つて清洲城主となつた。

弘治三年（信長二十四歳）十一月、信長の弟末森城主信行（勘十郎）が外父信廣と謀り信長をのぞかんとしたのでこれを降した。信廣の傳たりし林通勝、柴田勝家も信長に敵意を抱いてゐたが、つひに屈して信長の臣となつた。

永祿二年（信長二十六歳）三月、父のいとこ（兄の子）に當る信安の子信賢をその家督争に乗じてほろぼし、自分に對する禍根を絶つた。

このやうにして信長は十年ばかりの間に同族を倒して尾張全國を平定した。尾張は土地肥え産物多く、交通ひらけたる大國であるから、この國に主たることは大志をのばすには大切のことであつた。またそれだけに、四隣よりんの國々に多くの敵をひかへ、どこから何者が攻めて來るかわからなかつた。今、こころみに尾張をめぐる大名だいみょう家族を見まはすならば、

駿河三河 今川 義元

美濃 齋藤道三
近江 淺井長政
越前 朝倉義景
甲斐 武田信玄

など、いづれも信長にとつて油斷ゆだんのならぬ強豪ぞろひである。

知らず、織田信長、いかなる快腕くわいわんをふるつて、これらの強豪を制壓せいあつせんとはする。先づ信長を攻める者は誰ぞ。

信長の外敵ぐわいあつに當るに先立つて、彼の征戰せいせんに役立つた最も有力なる一人の武將について語らねばなるまい。

尾張 張 經 營

木下藤吉郎は天文五年、尾張國愛知郡中村の木下彌右衛門の子として生れた。彌右衛門は信長の父信秀の鐵砲足輕てつぱあしかりであつた。ある時の戰に負傷して故郷中村に歸り、百姓となつて近村の女を娶り藤吉郎を生んだ。藤吉郎八歳の時父彌右衛門は死んだので、母は同じ村の筑阿彌と云ふ人がやはり病氣で武士をやめて村に歸つてゐるのに再嫁した。そして一男一女を生んだ。男は後の大和納言秀長、女は徳川家康の室となつた南明院夫人である。

藤吉郎、幼名を日吉丸と呼ばれたるは、母がふところに日輸入ると夢みて受胎したるによる。太陽のやうに見える日の玉を夢に見るのは、よほど大熱にうなされた時であるが、この母の場合は靈夢吉兆であつた。

藤吉郎が信長に知られるまでのことは正史の多く採らざるところであるが、傳説は多少の眞實を含む。ここにしばらく「眞書太閤記」によつてあらましを語る。

藤吉郎は幼時奉公に出されたが十日とつづかず、送り歸されること三十八度に及んだ。天文十七年のこと、三十九度目の勤め先なる陶工の家を出奔して、三河の岡崎で文無しとなり、矢作川の橋の上で寝てゐると、野望を抱いて多くの仲間と共に放浪してゐた尾張蜂須賀村の住人小六政勝が通りかかつた。あやまつて藤吉郎の足をふんだのを藤吉郎烈火のごとく怒り罵つた。小六、見所ありと思ひ仲間に加へた。然し、藤吉郎は二年のち小六の許を圓滿に去つて、今度は遠江國に行き、今川義元の臣松下嘉兵衛之綱に仕へた。時に天文二十年、藤吉郎十六歳の年である。當時の彼がいかなる動物の顔に似てゐたかは判然としない。非常によく働き、愛せられてゐたが、同輩に妬まれて居にくくなり、之綱から路用を貰つて生國尾張に歸つた。

郷里の中村の者で、信長の小人頭の一若と云ふ者がある。藤吉郎は、この一若を頼つて、や

がて自分も織田信長に仕へるやうになつた。そのきつかけについても愉快な傳説がある。彼は永祿元年（二十三歳）九月、信長小牧山に狩せし時、一人でちきち信長の近くまで進み家來に敵國の間者として縛られた。藤吉郎、信長に向つて曰く「かくなる上は拙者をおそれ給ふにも及ぶまじ、生さんと思召さば放ち給へ、殺さんとならば殺し給へ、放ち給ふは名玉を得て再び棄つるにひとし、殺し給ふは名玉を得て碎くにひとし」と。信長これを異として召しかかへ草履取としたが、よく機轉がきくので、小人頭に取り立てた。

仕へてから二年たつて、永祿三年に、桶狭間の役があつた。

其三 桶狭間の役

今川氏は足利氏を宗族としてゐる。今川義元の父は氏親、母は大納言中御門宮胤の女だから織田信長とは家柄において段違ひである。父氏親の生れ落ちた時、三河の豪族たりし父義忠は戦争の最中であり、氏親の赤んぼの時に戦死した。氏親は長じてほとんどその生涯を戦場にすごした。

氏親の志もとより京師に入るにあり、後柏原天皇の御代、永正五年（二一六八）足利義植將軍宣下のことあるや物を獻じて賀し、將軍の信頼を得んとした。然し氏親は生涯京師に入ることができなかつた。

その子義元は永正十六年（信長生前十六年）に生れた。幼時、富士山麓の瀬太の庄にある善徳寺にて育てられ、雪齋といふえらい和尚に仕込まれて文事にいそしみ、將來を囑望された。雪齋は俗名大原崇孚、僧でありながら軍略に通じ、武將の資を備へてゐた。そのうちに義元は

兄が二人とも死んだので、還俗して今川氏のとをつぎ、國政に力をつくした。

彼は四隣に強敵をひかへること信長以上であつた。しかも父の大志をついで京師に入らんとを念願とした。そこで先づ、天文六年に女を武田信玄の長子義信に嫁することを約し、北方の英傑の侵略する憂を除いた。また東方、小田原城主北條氏康に對しては、妹をめあはせてゐた。北條氏康は十六歳で父氏綱のあとをついで小田原を治め、後年、天文十五年には武州河越にて足利、上杉の聯合軍を破り、永祿七年には里見義弘を國府臺に破つて上總を手に入れた。さて、信玄と氏康を結婚政略でさへた義元は天文十一年八月尾張に向つて進んだが、信長の父信秀奮闘してこれを拒いだため、義元は退却した。

三河の今川、尾張の織田の中間に、三河岡崎の城主松平廣忠があつた。廣忠は信秀と戦つて敗れ、救を今川義元に求めた。義元は人質を求めた。廣忠は六歳の長男竹千代（のちの徳川家康）を人質に送つたが、途中で竹千代は織田勢に奪はれ、竹千代は名古屋に護送された。この敵方の大切な人質を奪つた者は三河國渚美郡の土豪田原康光と云ふ男で、このごほうびに織田信秀から祿五百貫文をもらつた。米一石一貫文の相場だつたから米五百石の値段にしたらしいしてお金である。

天文十七年（信長十五歳）今川義元は駿河、遠江、三河の兵に雪齋和尚を將として進發せしめた。信長の父信秀は善戰したるも、つひに敗れて退いた。雪齋和尚の軍は進んで織田方の要害たる安祥城を攻めて守將織田信廣（信長の兄）を捕へたが、これを竹千代と交換した。翌天文十八年、信秀死し、信長あとをつぐ。これよりしばらくの間、今川、織田兩氏の間は平和であつた。

義元はこの間内政に努力し、また、雪齋和尚の斡旋によつて、武田、北條兩氏との盟約をいよいよ固めた。雪齋和尚は弘治元年に六十歳で死んだ。

義元は今や十分の用意を整へて、永祿三年五月、駿、遠、參の大軍をひきぬ、尾張に侵略した。今川氏にとつては父子二代の大志を遂げんとするのであり、今回こそはどうしても尾張を突破せんと自信に燃えてゐる。

織田信長は、前年の永祿二年に入京して將軍足利義輝に謁し、早くも京師における地盤を固めてゐた。去んぬる天文十二年二月には父信秀が内裏の築地修理に獻金し、同じ年の六月には今川義元が内裏修理料を獻じてゐる。今や、信長と義元との入京競争は、義元が地理上の不利を克服して尾張國境に迫つてゐるのであるから、もう、いづれかの一方が他を制壓して西上す

るばかりになつてゐる。眞に喰ふか喰はれるかの決戦前にあつた。この時、義元四十五歳。天資豪邁なれども將士多くは京都風になれて軍紀にたるみがあり、ただ三河武士の武勇のみは織田勢を破るに力餘るやに見えた。

織田信長は二十七歳。父のあとをついで尾張の半を平定せるのみで、いまだ尾張一國の主でさへもなかつた。武將の信頼必ずしも深からず、信長自身の實戰の功もいまだ積んでゐなかつた。彼は同族との鬭争には勝ち抜いたけれども、それらは以て今川の大軍に當るにふさはしき戰歴とはなし得ない。しかも彼は、この大敵の侵入を受けて綽々たる餘裕を示してゐた。

今川勢は、すでに織田方の築ける五つの砦のうち、比較的要害の砦と目さるる鷺津、丸根の二砦を抜いた。時に永祿三年五月十九日である。

信長は十八日夕刻にいたつて、居城清洲にて鷺津、丸根の砦が攻撃を受けてゐるとの注進に接したので、重臣をあつめて作戰方針を議した。老臣林通勝等は「今川勢は四萬以上と思はれますが、わが軍は三千に満ちませぬ。されば平地で戦ふは不利と考へますれば、清洲城に據つて敵をふせぐこそ然るべく存じます」と進策した。信長はこれを斥けて云つた、「城をたのんでやぶれざる者少し。いはんや敵の侵入にあたり居城をまもるは士氣を不振ならしめるは

かりぢや。須らく國境外に出でて戦ふべしとは先考信秀公の教である。余と志を同じうする者は余に従へ」と。これでは軍議も何もない、大將の命に従ふのみである。丸根の砦からは引續き警報がつづいたが、信長ちつともさわがず、世間話に夜を更かして諸將を歸らしめた。

十九日の朝になつた。鷺津、丸根の敗戦はもはや決定的となつてゐた。この兩砦が抜かれることは、信長にとつて大なる問題ではない。敵の兵力がなるべく分散して、本隊が一人でも少くなればよいのだ。信長はこの朝、敗報の注進を聞きすてに「敦盛」をうたひながら舞つた。「人間五十年、化轉の内をくらぶれば、夢まぼろしのごとく也。一たび生を得て、滅せぬ者のあるべきか」

と三度うたひ終つて、具足をつけ、立ちたるままにて食事を済まし、天明とともに馬に鞭打つて城を出た。城を出る時主従六騎。熱田まで三里の道を一氣にかけつけた時、二百餘騎が追ひついた。信長は熱田神宮に戦勝の祈願をこめ社殿を出たところには一千餘騎が集まつてゐた。

今川勢は十九日朝、鷺津、丸根を攻略してゐる。義元は出陣に際して謡曲「芭蕉」をうたつた。侍臣松田某が「身は古寺の軒の草となる」の句を忌みてとどめたら、義元怒つて「勝敗は時の運なり」とばかり、松田を斬り殺した。彼は今や、勝報を香掛より大高への途中で聞いて

安心し、桶狭間の北方十五町ばかりの所、田樂狭間で休憩を命じた。義元は「わが旗の向ふところ鬼神もまたこれを避く」と云つて意氣軒昂たるものがあつた。附近の祠官僧侶たちは酒肴をもたらし、軍をねぎらひ、全軍は祝盃を擧げた。

その情報は信長のもとに入つた。彼は熱田を進發して間もなく、はるかに鷺津、丸根方面に黒烟天に冲するを望んで、二砦すでに陥つたことを知つた。彼は直ちに濱子の近路を行かうとしたが、恰も満潮時だつたので、迂回して井戸田（今は愛知郡瑞穂村）に向つた。

熱田から鷺津までの間は、そのころは海岸傳ひであつた。今は陸地が伸びて當時の海岸は田畑つづきになつてゐる。信長の進んだのは今日の街道筋より少しく東方寄りであつたが、一隊を鳴海に向はせ、主力を善照寺方面に向けて、信長みづから指揮した。善照寺東方に着いた時鳴海方面の枝隊が今川軍の一隊に撃破されたとの報に接したので、信長はその主力軍を鳴海に轉せしめんとした。その時恰も諜報が入つた。「敵は田樂狭間にて休んでゐる」と。臣梁田政綱即ち信長にすすめて曰く「今川勢は今や鷺津、丸根の兩砦を陥れたれば氣驕り十分に備へてはをらぬかと存じます。不意打をかければ義元を討ちとることもできませう」。信長この進言を容れて自ら約二千の兵をひきゐ「名を揚げ家を興すは、この一戦に在り、衆それ努力せよ

但し全軍の勝利を期するため一々敵の首をとることはやめよ」と令して、迂路を山ぎはにとり旗を伏せて田樂狭間に突進した。

信長が義元の陣營に迫つたのは正午頃であつた。黒雲にはかに漲り猛雨暴風に乗じて西北方より來り沛然として今川勢の陣營に箭のごとく雨脚を叩きつけた。信長軍は追風に乗じて午後二時頃、太子ヶ根山を下り、突喊して義元の陣營に斬つて入つた。今川勢の士卒は暴風雨を避くるため民家や樹蔭に入つて警戒を怠り、織田軍の近接するを知らなかつた。加ふるに友軍との連絡が失はれてゐたので、一部の叛亂かと誤認して、周章狼狽し、全軍まつたく混亂におちいつた。信長は森三左衛門の進言によつて騎馬のまま眞ツ先に山を下つて、敵陣まぢかまで馬から下り立ち、兵士に先んじて突き入つた。「信長公記」のままを記すと、

「信長下り立つて、若武者共に先を争ひ、突き伏せ、突き倒し、いらつたる若者ども亂れかかつてしのぎをけづり鏑をわり、火花をちらし火焰をふらす、然りと雖も、敵味方の武者色は相まぎれず」

義元の身邊の武者は流石に奮ひ戦つたが三百人がいつしか五十人ばかりに討ち滅らされた。信長の士服部忠次は槍を揮つて義元に迫つた。義元は刀を抜いて槍幹を斷ち、忠次の膝を斬

つた。その時毛利新助秀高が進んで義元と戦ひ、つひに首級を擧げた。

今川勢は首將を失つたので全軍東方に退却した。遺棄死體二千五百。織田軍は敵を追撃せず直ちに兵を大澤村附近の間米山に集め、義元の首を實檢し、午後四時、往路を熱田に引返し、熱田神宮にまうでて神馬一頭を獻じて、薄暮清洲城に歸つた。今川勢の別隊は大高、沓掛などにも止まつてゐたが、いづれも潰走し、尾張に敵影を見ざるにいたつた。

信長は十人の僧をして、義元の首を三河に送らしめ、且つ熱田の近傍に義元の塚を建て、その菩提を弔うた。

三千の兵、四萬の大軍をこの一戦に破る。信長は門閥、兵數、領土の怖るるに足らざることを知つた。而してこの快勝の直接の原因は、梁田政綱が間諜を放つて義元の所在を知り、且つこれを襲撃すべきことを進言したるにある。よつて、信長は政綱に沓掛城と三千貫の采地とを與へた。

義元が戦死したあとの竹千代（後に家康）はどうなつたか。竹千代は織田廣信と交換されて三河に歸り更に駿府にとどめられてゐたが、その間、元服して元康と名乗つた。のち更に家康と名乗つたのであるが、ここには名前の混亂をさけて、以下家康の呼名で通す。義元、尾張を

侵略するに當り家康も從軍して大高の砦に入つた。義元戰死するや家康は敗殘の今川勢とともに退き岡崎に歸つて父の舊領をとりかへした。しかも勢いまだ微弱で、駿、尾の間に介在して城を保つことは望むべくもなかつた。しかも家康は今川氏に人質までとられてをり、今川氏の下に從屬すべき運命におかれてはゐるもの、織田氏の勢はすでに今川氏を壓してゐる。義理人情に囚はれると一身一城危ふく、強敵に屈すれば人質を失ふ。

この時、家康の妻の兄で、信長の一武將たる水野信元が家康と衝突してゐたが、兄妹の因縁あるにつまらぬことで争ふの不當なるを覺り、且つは主人信長のためをも考へて、この際信長と家康とを和睦させようと乗り出した。家康も主人今川義元の子氏眞の凡愚庸劣には愛想を盡かしてゐたので、信長の希望も和睦にありとわかつては猶豫もならず、つひに永祿四年二月、信長と和し、五年正月、清洲の城で信長と會盟した。そしてこの時元康の名を家康と變へた。

ここに松平(後に徳川)家康と織田信長との政治的連繫は成立した。時に信長二十八歳、家康二十歳、秀吉はまだ木下藤吉郎なる一陣笠で年二十六歳であつた。家康は翌永祿六年三月、今川氏に人質として取られてゐた子の信康を取りかへして、信長の女を迎へて妻としたので、織田、徳川二氏はいよいよ緊密に結ばれた。

信長はまた、この年(永祿五年)十一月、岩倉の織田信賢(祖父信定の兄の孫)を討つて、まつたく尾張を統一することができた。時に信長年二十九。翌六年、小牧山に城をきづいてをり、美濃經營にうつつた。

さて、義元亡きあとの今川氏はどうなつたか。義元の嫡男氏眞は資性暗愚、讒言によつて功臣を斥け、みづからは和歌、蹴鞠にふけり、政治、軍事ともに緊張を缺いで、父の弔合戦など思ひもよらぬことであつた。家康が舊主今川氏を氏眞の代にいたつて去つたのも當然である。

今川氏のかくも衰へたのは、家柄高く國富みて、京都の公卿たちとの往來も繁く、自然文弱の風が上下に浸透してゐたからである。尤も文弱であつただけに文事、風流の途はすすみ、今川義元の庭園とて、三保の松原をとり入れた庭園が今日も愛庭家の間に知られてゐる。

今川氏すでに恐るるに足らず。信長の向ふところは西方にあり、目差すは京都であつた。

其四 西方經營

織田信長は桶狭間の一戦によつて實力の自信を得た。少くも、大國必ずしも惧るるに足らざることを経験した。更に京都に向はんとして、先づ行くての強敵に目をつけた。美濃の齋藤、近江の淺井、越前の朝倉。

美濃の齋藤は信長の夫人の實家である。而して、信長を試みてその恐るべきを知つた齋藤道三は次子を偏愛して不肖の嗣子義龍と争ひ、桶狭間の合戦に先立つこと三年、弘治三年に子と戦つて討死した。嗣子義龍は信長の擡頭を忌み、信長を殺さんと刺客を放つた。このことは信長をして美濃を経略せしむる好因縁となつた。しかも齋藤の家臣には日根野兄弟あつて、よく兵を用ひ士卒また強豪である。義龍早世して子の龍興立つ。性凡庸。信長が美濃に進出する時機は到來した。

しかも、美濃勢は地の利を得て容易に信長をして侵入せしめない。信長、一度は州侯を攻め

てつひに抜くを得なかつた。

信長、一日將士を會して曰く「余、屢々濃州に兵を入るるもいまだ効無し、これ地の利を得ざるによる。州侯を占領して根據地となし漸次敵地を蠶食せんはいかに」と。一將曰く「州侯は取るに易く守るに難し、いはんや州侯川（長良川）は雨期毎に氾濫し我方との連絡を斷つておいてをや」この時末席の一士卒にちり出て云ふ、「拙者願はくば州侯をまもらん」見るとその士卒はいまだ諸士の列にも加はつてゐない小人頭の木下藤吉郎である。一座失笑す。信長即座に命すらく「好し、汝を擧げて州侯の守將たらしめん」と。秀吉はこのやうに出世の機會を獲得し、信長はこのやうに秀吉を取り立てたのである。藤吉郎は州侯で敵前築城に成功し、よく敵の來襲をふせいだ。

地圖を按ずるに、信長の居城清洲城は尾張の中央にあつて、美濃經略に不便である。彼が進出の足場はどうしても北方にうつされねばならぬ。藤吉郎はすでに州侯を取り、信長に賞せられたが、彼は更に小牧山の據るべき要害たるを見て信長にすすめ、信長これを容れて永祿六年七月、清洲城から小牧山の城にうつつた。

然し要害に據つて守ることは信長の兵法に無かつた。彼は永祿七年八月、兵を小牧山に集め、

「これより三河を攻めん」と揚言して、突嗟に馬首をめぐらして美濃に向ひ瑞龍寺山に至つて龍興の居城井口に火を放つた。

齋藤龍興は、すでに領内に人望を失ひ士氣沮喪してゐる。そこへこの奇襲である。龍興は一たまりもなく井口城を明け渡した。信長は井口城に入つた。城下町を改めて岐阜と名づけた。信長は改めて自ら岐阜城を築き、岐阜城にあること、これより後十三年間、安土城に移るまでここを根城としたのである。

信長は岐阜城に入つた際、朱印「天下布武」をつくつて、そのちこれを用ふることとした。けだし、信長の大志をあらはしたものである。

岐阜城は四層の建築で、第一階の各室に用ひたる襖の緋金、釘等は純金製、縁の壁には日本及び支那の古き歴史を寫した華麗な羽目板を打ちつけた。第三階には閑靜な茶室があつた。

信長は美濃を平定したるのち、永祿四年（二十八歳）正月、熊野詣と稱してひそかに京都に入り、將軍義輝に謁した。義輝は大に満足し、信長を尾張の守護とした。そのころの京都は三好一黨の跳梁してゐた時である。もとより信長の悠遊するをゆるさなかつた。しかも、信長の實力は全日本に知られ、盛名はすでにあがつてゐる。正親町天皇はこの年十一月、立入頼隆

を勅使として岐阜に下らしめ、信長に對し、美濃、尾張兩國の御料所恢復のことを御命じになつた。信長は聖恩に感激した。

其五 淺井氏と武田氏

美濃に隣る國は近江。近江に勢威をふるふは淺井長政である。

信長は永祿七年、長政に好を通じ、妹お市の方を長政にすすめた。お市の方は後に數奇の運命に弄れるが、實に絶世の美女であつた。長政は父久政の命によつて、永祿三年、六角義賢の將平井某の女を娶つたが不和の仲となりつひに離縁した。そこへこの美女である。悦んでお市の方を容れて正室とした。時に永祿七年四月である。

次には甲斐信濃に蟠踞する武田信玄が信長の心配の種である。

武田信玄は戰國時代一流の武將であり、一流の政治家であつた。信濃の上田地方の葛尾城主・村上義清は信玄の侵略を受けて、救援を越後の國主上杉謙信に請うた。謙信も一流の武將、一流の政治家である上に猛烈に義理堅く弱きを助ける俠氣を備へてゐた。この俠氣が歴史をつくつた。彼は實に天文十二年（二二一四）から十二年間にわたつて、信玄と川中島附近で戰鬪を

交へたのである。この間、信玄は三十三歳から四十五歳に老ひ、謙信は二十四歳から三十六歳になつた。ともに西上の大志を抱いて、あたら男盛りを劍戟の間にすり減らしてゐたのである。もちろん、天下に號令するよりも好敵手と兵を交へる方が趣味にかなつてゐたと云へば、それまでのことである。

何にしても、この兩雄の爭覇は織田信長にとつてもつけの幸となつてゐた。信長が美濃の齋藤と戰つてゐた最中の永祿四年は、いはゆる川中島合戰の最高潮に達してゐた時で、この年九月十日の兩軍の決戦は眞に屍を山ときつき血潮を決河となしてゐたのである。

信玄は戰場にあつて織田信長の桶狭間の快勝を聞いてゐた。そののち、清洲の近くに住む天台宗の僧天澤が甲斐に入つて信玄に敬意を表した際、信玄は天澤に請うて信長の人物、性行を詳に聞いた。そして、信長また恐るべしとした。

信長もまた信玄を恐れ、進んで和睦するに如かずと考へてゐた。和睦には進物が必要である。而して、進物に美女が第一等であることは信長すでに経験済みである。永祿八年、信長は信玄に「某の姪に容色、心のほども人並すぐれたる者有之、貴殿の御子息諏訪四郎殿に御すすめ仕りたく存候」と申入れた。信玄が承知した。結婚させてみると父親ながら恍惚とするやうな

美夫人ぶりだ。諏訪四郎、即ち武田勝頼、芝居でもよほどのやさ男でないとならぬのが信長一と粒よりの美女を妻にしたのである。勝頼、二男ながら嗣子となつたので信長いよいよ思ふ壺である。然るに勝頼夫人は信勝を産んで間もなく死んだ。縁が切れては信長の深謀水泡となる。よつて今度は信玄の女を自分の嫡子信忠に配せんことを請ひ、信玄これを快諾した。その時信忠、いまだ奇妙丸と呼ばれわづかに十一歳。夫人も同年だつたから、無論これは許婚關係である。かくして、織田家と武田家とは二重につながる縁となつた。この間、信長はいく度かにわたつて珍品あまた武田家に贈つてゐる。信玄は信長を二とない親類だと思つてゐる。このやうに、結婚政略によつて近國の大豪を手なづける一方、また、武力を用ひて禍根を断つことにも機を失はなかつた。即ち、浅井長政に妹お市の方を妻はせた年の前年、永祿十年の二月に、初めて兵を伊勢に進めた。

伊勢には當時大名と云はれるほどの人物もゐなかつたが、土豪林の如く互に並び立つてゐた。信長の命によつて、瀧川一益、明智光秀、兵をひつさげて北伊勢に入り、桑名あたりから放火しつゝ進んだ。近隣の土豪相ついで降伏した。この年の秋に入ると、信長みづから尾濃の大兵をひきゐて伊勢に進撃し、翌永祿十一年また兵を入れてしきりに伊勢を経略した。ただ、神戸

城主神戸友盛、勇敢無双にして信長に降らない。よつて信長は、三男信孝を神戸の女婿として手なづけ、かくて漸く伊勢北部を平定することができた。

ここで明智光秀の擡頭について一言記さねばなるまいか。

明智光秀は美濃の守護土岐氏より出で、通稱は十兵衛と稱した。父については詳でない。土岐氏ほろびたるのち、國を出て諸國を歴遊し武藝を練つた。はじめ、越前の朝倉義景に仕へ、去つて織田信長に致仕した。

信長は光秀に初めて會見した時、その人物を見込んで、いきなり一萬貫で抱へることにした。一萬貫は五萬石との見方もあるが「貫」を單位とすれば、さきに桶狭間で偉功をたてた梁田政綱が三千貫を報いられたのと考へ合せて、その高く買はれたことを知るに足る。

さて、このたびの伊勢攻略は、光秀の軍功をあらはした最初のものであつた。信長の重臣瀧川一益と並んで將として進撃したのだから彼も大に働いたわけである。

第三章 入

洛

其一 京都の状勢

織田信長が岐阜城を根據として、結婚政略と戦争とによつて四隣大小の敵を自家やくろう中の物としたり、とつちめたりしてゐた永祿年間に、京都は足利將軍の下、管領、その臣、そのまた家來、だいたいにおいて下が上に刺ち市中は争亂の巷、將軍はあつて無きがごとくであつた。

先づ十一代將軍義輝の時代から見るとしよう。

正親町天皇の御代、義輝は室町時代末期にあつて不遇、不満、多事、不安のうちにごした亂世の將軍である。彼の在職は天文十六年（二二〇六）信長十三歳）から永祿八年（二二二五）信長三十二歳）まで十九年間であり、彼が十一歳から三十歳までの間である。この十九年間に一年として平和のうちにごした年はなかつた。

義輝は劍を劍聖塚原卜傳に學んだ。塚原卜傳は常陸塚原の人、飯塚山城守家直に従つて天真

正傳の劍法を會得し常に七、八十人の從者をしたがへて諸大名に眞技を教へてまはつた。義輝は亂世の將軍としてこの劍聖を師としたのである。

義輝は細川晴元を管領としたが、晴元はその家宰たる三好長慶と争ひ、長慶の勢、晴元を凌いだ。而して長慶は當時畿内諸國を平定して、勢力淡路、阿波に及んでゐた。その巨松永秀久かねて長慶の勢力を奪はんと狙つてゐた。

近江の六角義賢は長慶の專横を憤り、晴元の子晴之を擁して長慶の軍を破り、六角軍京師に火を放つたので、市中は一時應仁の亂當時の混亂におちいらんとしたが、義賢、長慶の和睦成り、一旦京師から難を避けてゐた義輝も歸京した。管領細川晴元、永祿六年病死し、三好長慶また七年病死せるのちは、長慶の臣松永秀久、政權を獲得した。

時に、三好氏の一族に三好長逸、同政康、岩成友通の三人あり、三人衆として勢力があつた。將軍義輝の一族義榮、將軍職を狙ひ、この三人衆と松永秀久とに助力を頼んだ。

永祿八年五月十九日、秀久の子久通は三人衆とともに義輝を襲うた。義輝はさきに記したるごとく卜傳の高弟である。亂闘となればひげはとらない。折から館は手薄であつたが、忽ち二十餘人を斬り伏せた。それは多すぎると思はれるかも知れないが、卜傳の劍法、横一文字の構

による一の太刀の秘技で行くと雑兵の二十人くらゐわけなく斬れる。この秘技は、右手に持つた劍を左へ一文字に倒し、左手を峰にあてて横なぐりに行くと見せ、劍をひるがへして敵を突くのである。義輝の亂闘の劍のさばきはこれであつた。

然し何さま多勢に無勢である。義輝もつひに槍で突かれ、火を放たれ、討死した。時に年三十。

義榮は望を達して將軍となつたが、もとより實力は無く、松永秀久また三人衆と不和になつて互に争鬪を事とした。

この情勢を見て、織田信長は義輝の弟義昭を擁して入洛した。

足利義昭は奈良興福寺一乘院主となり、覺慶と稱してゐた。三好三人衆は覺慶の弟を殺し、更に彼をも殺さんと圖つたが、覺慶は細川藤孝（幽齋）に授けられて近江にのがれ、和田秀盛に頼り、還俗して義昭と名乗つて縁ある諸大名に京都回復の援助を求めた。その主なる者は薩摩の島津義久、安藝の毛利元就、越後の上杉謙信などであつた。信長も頼まれた一人であつたが、當時彼は美濃で齋藤龍興と戦つてゐたので、どうにも助けやうがなかつたのである。義昭はのち越前の朝倉義景に頼り、留まること三年に及んだ。義昭、朝倉氏の微力なるを感じ、更

に重ねて織田信長に助力を請うた。

織田信長は義昭が百方に味方を求めて、どんづまりに自分を頼つたことを知つてゐるが、彼はこれを自己の大志遂行の絶好の機縁に活用した。將軍を援けて京師に入る、と云ふことは亂世の大義である。即ち義昭を越前より迎へて美濃西莊なる立政寺に請じ、優遇した。時に永祿十一年七月である。

信長は前年兵を伊勢に進めて、このころその北部を平定し、後方の憂を斷つた。次には京都進出の途中にある近江を経営せねばならぬ。

近江には六角氏も信長の進路を阻んでゐたが、信長は三日間に十八城を下し、同時に國內の治安につとめて民心を收攬した。

かくて信長は永祿十一年十月、入洛した。三好の一黨は信長の威風に怖れて攝津に逃げた。信長は岐阜を立つてから二十日ばかりにして京都に入り、東福寺に入つた。

彼は先づ市中の秩序維持に努力した。宮廷におかされては信長の軍或ひは市中をさわがすこともあるかと御憂慮あそばされたが、市中は、信長の入洛によつて反つて平穩となつたので御安心あそばされた。市民は競つて信長に物を獻じた。彼は親しく出でて應待した。連歌の巨

匠紹巴亦來つて賀し扇子一對を獻上した。信長喜んで、

二本手に入る今日のよろこび

と即興に詠すると、紹巴直ちに、

舞ひつるる千世萬代の扇にて

と和した。信長大満足にて祝儀を奮發した。市民傳へ聞いて、この風流大名なら亂暴はしまいと安心した。たまたま、信長部下の一士卒が商人を虐めてゐたのを取締の者がとらへて東福寺に引出した。信長は庭前の大木にその士をからめて人々に見せしめとしたので市中いよいよ安堵した。

義昭は信長に迎へられて入洛し清水寺に入つた。その時信長は五萬の兵をひきゐて扈從した。義昭は十月十八日足利十三代將軍となつた。信長この年三十五歳。群雄を尻目に、將軍を奉じて京師に入る。彼の威風しのぶべし。しかも脚下、身邊、いまだ甚だ不安である。

信長と同じく義昭に援助を求められた諸大名は過ぐる數年間に何をしてゐたのか。試みに永祿六年（二二二三）から、信長、義昭を奉じて京都に入りし永祿十一年（二二二八）までの天下の狀勢を概観しよう。

永祿六年（二二二三）信長三十歳）八月、松平元康、名を家康と改め、今川氏真と斷絶す。九月、三河に一向宗徒の一揆あり、家康部下の諸將中これに與するもの多し。耶蘇教宣教師ヴィレラ堺より京都に入る。

永祿七年（二二二四）信長三十一歳）正月、北條氏康、里見義弘と國府臺に戦ふ。三月、一向一揆家康に降る。五月、毛利元就、安藝の鎭山より採れる金銀を内裏に上る。八月、耶蘇宣教師フロイス平戸に入る。（この年信長岐阜を攻略す）

永祿八年（二二二五）信長三十二歳）五月、將軍義輝三好一黨に殺さる。七月義昭近江にのがる。十一月、信長、養女を武田勝頼に妻はす。

永祿九年（二二二六）信長三十三歳）八月、義昭朝倉氏に頼る。十一月、毛利元就、尼子氏を亡ぼす。十二月家康、徳川姓を名乗る。

永祿十年（二二二七）信長三十四歳）五月、信長、長女を家康に妻はす。十月、三好氏、臣松永久秀にやぶらる。十一月、信長その子信忠のために武田信玄の女を娶ることを約す。

永祿十一年（二二二八）信長三十五歳）十月、義昭將軍となる。十二月武田信玄今川氏の軍を駿河にやぶる。家康遠江に入つて今川氏を下す。

さても、攝津にのがれた三好の殘黨は、義榮を奉じて阿波に落ちたが、義榮はそこで間もなく病死した。信長はわづかの間に、攝津、河内、大和を平定し、松永久秀の歸順をゆるした。近畿を平定したる信長は、永祿十一年十一月十二日、禁制を市中に出した。

禁制

一、當手の軍勢亂妨狼藉の事

一、猥りに山林竹木を伐採する事

一、押買押賣並に追立の事

右の條々違背するに於ては速に嚴科に處せらる可きもの也仍て如件。

次で論功行賞にかかつた。また畿内の社寺の裕福なるものに命じて將軍家再興の資金を賦課した。石山本願寺からは五千貫を獻納した。その他名器珍寶あまた集まつた中には、連歌師紹鷗の菓子膳、某氏からの義經一の谷逆落しに用ひし鐘などもあつた。

これはもちろん、將軍義昭を祝福するためでなくて信長を歓迎する志のあらはれであつた。京都は久しぶりに王城の地たる、やわらぎに満ちた。

義昭は細川邸に入り、信長は洛外東山の清水寺に移つた。そして、十月二十一日、義昭と信

長とは参内して天顔を拜した。

正親町天皇、親しく兩人を慰勞し給ひ、あらためて義昭を征夷大將軍に、信長を左兵督に任じ給うた。然るに信長は微賤、その任に堪へずとて拜辭したので、信長を従五位下に叙し、彈正忠に任じ給うた。彈正忠は彈正臺の官名である。彈正臺は風俗を正し非違を検する役所であつた。その官職は、尹、弼、忠、疏である。信長はいまだ地方出の一武將であつたのだ。

義昭は細川邸の假營において盛大なる將軍宣下の祝典をあげんとしたが、信長はこれをいさめて、四方いまだ平ならず、今は悠遊の時にあらず、と大仰な祝典は止めさせ、やや内輪の祝儀とした。

當日、祝儀に先立ち、義昭から信長に特使を立てて、副將軍兼管領になるやう再三懇請したが信長は固辭して受けなかつた。これは信長の深慮によるのであつて、足利將軍家の恩顧を蒙る地位にあることを避け、もつて他日雄飛のゆとりを存したかつたのである。そこまでは義昭よう察しなかつたから信長の謙讓の美德によるものと思ひこみ、辭退されればされるほど、いよいよ報いたくなり、せめて五畿の地を以て恩賞となさんと申出た。信長はわづかに、泉州堺及び江州の草津、大津のあたり少しばかりの地を取り、あとは悉く義昭に忠勤を上げむ者に

わかつこととした。しかも、この少しばかりの地は當時の主たる物資集散地であつた。

よつて義昭は信長に感狀三通を與へたが、信長はその一つを返して二つだけを受けた。一通に曰く、

今度國々凶徒等、日を歴す、時を移さず、悉く退治せしむるの條、武勇天下第一也。當家再興の大忠之に過ぐ可からず、いよいよ國家の安治、偏に頼入れ候の外他事無し、猶、藤孝、惟政、申す可く候也。

永祿十一年十月二十四日

御判

御父 織田彈正忠殿

他の一通に曰く、

この度大忠により、絞桐引兩筋、之を遣はし候。武功の力を受く可く祝儀也。

永祿十一年十月二十四日

御判

御父 織田彈正忠殿

「御父」とあるは、三十二歳の義昭が、三十五歳の信長を尊んでかく呼んだのである。

信長は義昭の儀式の席には出なかつた。これは義昭としていささか自尊心を傷けられたやう

である。然し、この席にはどうしても出なければならぬ人物であつた。

さて、この日の祝儀の次第を見るに、能を見ては祝盃を汲むこと各々三度。最初にワキ能として「高砂」を觀世左近太夫、今春太夫、觀世小次郎が謡ひ、大鼓大藏二介、小鼓觀世彦右衛門、笛ちようあひ、太鼓觀世又三郎がつとめた。次で二獻の御酌あり、御酌は大館伊豫守晴忠、この時、信長に再應のお使があつて、信長漸くこれを受諾し式場に到着、席に列なると、早速義昭將軍信長のため手づから酌をした。そして、鷹の腹巻を引出物におくつた。さて、二番の能は「八島」大鼓は深谷長介、小鼓は幸五郎次郎。終つて三獻の御酌あり、一色式部少輔藤長が御酌をつとめた。次で三番として「定家」四番に「道成寺」この時義昭、信長に鼓を所望した。信長が鼓の上手であることは當時すでに武將の間に有名であつた。然し、信長は辭退した。なかなか扱ひにくい珍客ではあつた。よつて、太鼓は大藏二介、小鼓は觀世右衛門、笛は伊藤宗十郎がつとめた。

儀式終るや信長から能田樂一座の者どもへ十分の引出物を贈つた。どこまでも如才無き信長であつた。

しかも、信長は將軍や市民と享樂を共にすることのみに心を留めてはゐなかつた。彼の念と

するところは國內政治の更新にある。この將軍宣下の式が終ると、先づ、諸國に令して、旅人、商人を惱ましてゐた關所を廢止した。

かくて信長はひとまづ、この月二十八日岐阜に歸つた。兵馬を休ませてこの年をすごした。

三好の殘黨は信長が京都から岐阜に歸つた隙を狙つて京都を回復せんとたくらみ、永祿十二年正月四日京都に攻め入つた。美濃の齋藤龍興がこれに荷擔した。將軍義昭は、細川邸から六條の本圀寺にうつつてゐたが、叛亂の徒黨は本圀寺を包圍した。

警報は正月六日岐阜に達した。信長は伊勢に向はんと準備してゐたが、直ちに京都に入つて本圀寺に至つた。叛徒は護衛の諸士によつて、すでに撃退されてゐた。

信長は京都及び近畿地方の三好殘黨を徹底的に撲滅した。

其二 尊 皇

そもそも、織田信長の尾張を平定して西上の決意を固め、諸般の謀略と戦争とに寧日なかりし所以は、一に、皇室の式微をありし昔の御有様にかへし、更に皇室中心、一君萬氏の新政を布かんとする大志あるがためであつた。

今や信長は將軍義昭を奉じて京師に入り、京都騒亂の火附犯人たる三好の一黨を撲滅し、京都の治安を維持してゐる。彼はもはや伊勢進撃どころではない、一日も早く叡慮を安んじ奉らねばならぬと思つた。

そのために先づ、皇室御料地から京都に奉るもろもろの御用度品を途中で失ふことのないやう、嚴重に警護せしめた。

且つ、村井貞勝、朝山日乗の兩人に命じて、皇居の御造營に着手せしめた。

同時にまた足利將軍に對しても盡すべきことを盡したいと思つた。そこで永祿十二年正月か

ら、二條の地を卜して二條城、即ち幕府の本營を造營した。二月二十七日鍬初めして、それより夜を日について普請をすすめたが、人足が不足してゐたので、諸士が進んで土石を荷つた。

造庭には、細川の邸に古來からある藤戸石を用ひることにした。信長は自分で細川邸に出かけ、その大石に綾錦を着せ、さまざまの花にて飾り、笛太鼓にてはやし立て、木やりを唄はせ何の苦勞も無く、さしもの大石を運び込んだ。また「九山八海」と稱する巨石をも引き寄せて趣を添へた。

かかる間に禁裏御所御造營の準備も整うた。御用材は大阪より鳥羽へ着けらる。材司大澤大炊介、藤原行忠、忠節をつくし數萬本の御用材を京都に送り奉る。御修理、御造營悉く成りたるは足かけ三年目の天龜二年九月であつた。紫宸殿、清涼殿、内侍所、すべて清らかに神々しく造營成り、主上殊の外御満足に思召した。

信長はまた皇室の財政を整理し、公卿の窮乏を救うた。ことに、末代までも御調物の絶えざるやう、信長の奉れる御財産の中から、市中の商人どもに金錢財物を貸し與へ（一説に、米を貸した、とある）その利子を年々取り立てて御所の御經費にあてた。

廷臣公卿の救恤についても信長は心を用ひた。二、三の例を挙げよう。

天正三年一月四日。(御所御造營成りて四年目) 信長、大納言に任せられ、次で官位を進めらるとの御事あり、その時、信長より砂金、卷物など數を盡して獻納した。なほ、諸公卿にはそれぞれ知行を參らせた。

天正四年十一月二十一日。信長内大臣に進めらるるや、攝家、清家等へ知行を増し參らせた。禁中へは黄金二百枚、沈香、卷物などを奉る。信長、畏くも御衣を拜領す。

信長の勤皇はもとより決して形の上ばかりではなかつた。彼は衷心からの皇室中心主義政治家であり、一君萬民の新政治實現への努力をつづけた。尙ほ、信長の尊皇と關聯して、少しく年代は先によるけれども、ここにあはせて信長馬揃の盛儀を記す。

信長尊皇のこと、ただに宮居御造營、公卿救濟などのことにとどまらぬ。更に皇室の御心を安んじ奉る主旨にて、天正九年(二二四一—信長四十八歳)二月二十八日、内裏の馬場にて御馬揃の儀を天覽に供した。これは今日の觀兵式にも當るものである。

この日、信長は五畿内隣國の大名小名御家人を召し寄せ駿馬を集めて御馬揃の儀を催した。内裏の東に、北より南へ八町にわたる馬場をしつらへ、馬場の中になてに、高さ八尺の柱を立て、毛氈でつつませ、埒をゆはせた。また、禁中東御門御樂地の外に行宮をつくりまゐらせ

た。まことに金銀目もあやな飾り立てである。

時の天子正親町天皇親しく行宮に行幸あそばされ、この盛儀を見そなはせられた。雲客卿相殿上人、衣香四方にかをり百花咲きそふにさも似たり。

信長はこの日午前八時、下京本能寺を出立、室町通を上り、一條筋を東へ御馬場に入つた。美々しき行列がつづき、天下の駿馬六匹が曳かれてつづいた。いづれも奥州津輕の果からまで第一等の名馬を諸大名から送つて來たのである。

尙ほ、これに添へて信長が天覽に供せんとすの赤誠から、京都、奈良、堺にわたつて珍らしい唐綾、唐綿、唐縫物などの善美をつくしたるものとり揃へた。また獻納のためとりよせたる「きんしや」と云ふは、唐土天竺の天子が着るものと覺えて、眞ん中に人形を結構に織り付けたる立派な織物であつた。

信長自身のいでたちもすばらしかつた。頭巾をかぶり背に花を立てたるは高砂大夫のいでたちか、小袖は紅梅に白のだんだん唐草模様。その上に蜀江の錦の小袖、袖口は唐土より傳來のふくりんである。肩衣はべにどんすにきりから草。袴も同じく。腰にぼたんの作花を挿したるが、これは宮中からの下され物であつた。太刀は鬘斗つき。沓は狸々皮。

つづく中將信忠、つづく織田三七信孝、いづれも美々しく着かざつて名馬にまたがる。
この日の馬揃が、餘りに美しくもまた勇まし氣であつたので、主上には、三月五日に全一
度との御所望であつた。よつて、信長この日には、前の御馬揃の名馬の中から、更にすぐれた
る馬五百餘騎を寄せて御覽に供した。

第四章 近畿經略

其 一 但馬・伊勢平定

信長は永祿十三年八月、即ち義昭を奉じて京都に入り、義昭、將軍となりたる翌年、但馬の山名祐豊を攻めて降し、生野銀山を手に入れた。生野銀山は大同年間、即ちこのころから凡そ七百五十年ばかりも前に発見されてゐたらしいが、探掘されるに至らなかつた。それを山名祐豊が注目して天文十一年から掘り初め軍資金にあててゐた。今、信長これを領有するや、生野に代官を置き、さかんに探掘せしめた。

信長は轉じて伊勢に向つた。前に、北部伊勢は瀧川一益、明智光秀等をして平定せしめたがまだ南部伊勢には強豪多く、信長に心服してはゐなかつた。信長は自ら出陣して南部伊勢をも平定し、諸城を破壊し關所を撤去した。當時、日本統一の形の上の第一の仕事は諸國大名の領分境にのこされた關所を、現實にとりのけて、諸人の往來通行の不便をとりのぞくことであつた。信長は京都で施政方針としてきめたことを伊勢では身を挺して實行したのである。

次の討つべき相手は浅井、朝倉であつたが、それはのちにわかつたことで、信長はこの兩氏がどこまで自分の敵か味方か、よく判断し得なかつたのである。朝倉氏は織田氏と共に足利氏の管領斯波氏の代官であり、信長が織田氏の一支流として主筋を浚いで尾張を平け美濃に伸びたるに對し、越前の領主朝倉氏は正系を傳へて今義景に至つてゐる。義景から見れば信長は家柄が下であり、その下風に立つを屑しとしない。のみならず、朝倉氏もまた足利將軍から支持を頼まれてをり、もし當時、一向一揆に悩まされてゐなかつたら或は信長より先に京都に入つてゐたかも知れなかつたからである。されば信長入洛ののち、義昭には敬意を表したいが信長の下に屈するは忍びがたく、つひに信長の招請をも黙殺した。

朝倉氏は美濃に飛地を持つてゐたが、それを叡山に寄進した。信長はかねて叡山の横暴をにくんでゐたので、その寄進地を没收した。叡山の衆徒は朝倉氏と結んで信長に抗争した。

88 信長は京畿の地漸く平穩となつたので、元龜元年四月、京都を進發して、朝倉征伐のために越前に向つた。この進軍には盟將徳川家康も同行し、以下、柴田勝家、明智光秀、前田利家などの猛將をすぐつてをり、部將の中には、すでに一城の主たる當年の木下藤吉郎もゐた。家康は三河にあつて一向一揆を平げたるのち、ほぼ東方の憂をのぞいて、今、この北征に加はつて

ゐる。

信長軍の進撃は北國武士の眼を見はらせた。三間柄の朱槍三百本をそろへ、揃ひの華やかな軍装の武者五百餘騎がつづき、而して信長自身は紺地金襴の包具足に白星の三枚兜（しころよ）り三枚の板をつなげる兜を着け、黄金造りの大太刀を佩き、「利刀黒」と呼ばれたる名馬にまたがった。

信長軍は行く行く諸城をおとして、まさに朝倉義景の本城たる一乗谷に迫らんとしてゐる。その時、後方なる江北の領主、妹婿の浅井長政は朝倉氏に應じて信長攻撃の態勢をとつた。

信長は思ひもかけず腹背に敵を受けた。浅井氏が何故の敵對であらう。浅井氏は織田氏と姻戚關係を結んでゐたが（信長の妹お市の方は長政の夫人）朝倉氏とも盟友の間柄である。浅井氏が近江の南半分を領する六角氏と對立してゆづらざるは朝倉氏が浅井氏を支持せるによる。結婚關係ばかりに頼つて、この大切な盟友を失うてはならなかつた。

89 そんな因縁のあるところへ、長政の老臣たちが、信長と云ふ男は今日縁者でも明日は敵となる人物だ、と長政を焚きつけた。そこで浅井長政、つひに朝倉をたすけて信長に當ることになつた。お市の方の苦境や想ふべし。

信長は窮地におちいれることを鋭く感じたので、敏速に、勇敢に京都に引き返した。木下藤吉郎、最も歩のわるい後詰を引き受け、金ヶ崎城にとどまつた。信長は早晩、この復讐戦をやらねばならなかつた。

其二 姉川の合戦

京都に退却した織田信長は、一旦岐阜城に歸つて、十分に軍備をととのへ、六月十九日（元龜元年）近江に侵入した。信長は先づ浅井長政に降伏をすすめた。長政はお市の方と結婚して六年目、三十と二十八の夫婦仲である。「貴殿の御取持（仲人になつたこと）世々未來忘れ難くは存ずれど、當城にて尋常に腹を切り申すべし」と、この勧告を斥けた。信長はやむなく妹むこの浅井長政を敵とすることとなつた。

信長は敵地に入つて、砦を抜き城を攻め、近江の東、姉川のほとりに陣した。

朝倉軍は南下して浅井軍と合し、姉川をへだてて織田軍と對峙した。時に元龜元年六月二十一日である。浅井長政は小谷城にあり。信長は横山城を圍んでおいて、その前面の丘陵の上に本陣を備ふ。その中間右手の小高き所に朝倉軍の本陣があつた。

長政、手兵五千をひきゐて小谷城を出で、朝倉軍の前軍朝倉景健の八千と合して、朝倉軍本

陣大依山に進み、二十七日夜陰に乗じて信長の陣營に突進した。

織田軍の先陣は五千人よりなる徳川家康の軍である。家康みづから槍をとつて進み朝倉八千の軍を突き崩した。一方、浅井軍五千は信長軍に向つた。信長軍一時危ふかつたが、難なく敵を撃退した。浅井軍中また勇士あり、中にも遠藤喜右衛門は亂髮、單騎本陣に斬つて入り信長に迫らんとしたが、竹中久作のために討たれた。

兩軍の戦は午前六時にはじまつて午前十時を頂點とした。北軍(浅井、朝倉軍)の敗れたのは士氣、統制、ともに織田軍に劣つてゐたためである。かくて横山城は降つた。朝倉軍は敗退した。よつて信長は一旦京都に入つて、公卿、將軍に軍狀を報告したるのち、七月八日岐阜に歸り、家康また軍を岡崎に還した。

さて、三好三人衆の一黨は、さきに信長によつて京畿における地盤を根絶されたが、殘黨は阿波を根據地として京都奪回を目ろんでゐた。彼等は空巢狙ひのやうに信長が岐阜に歸ると、そのあとを狙つてゐたのである。今度も姉川の合戦後、信長あらざるに乘じて、またもや元龜元年八月京都をうかがひ、大坂西方の野田、福島に陣をとつた。その兵力八千と聞こえたり。

信長かくと聞いて京都に入り、更に天王寺まで兵をすすめた。將軍義昭またみづから兵をひ

きゐて攝津中島城(細川幽齋の居城)に入り、信長と共に敵に當ることとなつた。

三好方には本願寺の狂信者なる一向一揆の徒が味方した。本願寺十一代の顯如上人は、かねて朝倉義景と姻戚關係にあつたので、信長を敵としたのである。その宗徒の數二萬と注せられ鐵砲隊三千を含んでゐたから必ずしも烏合の衆でなかつた。

この戦の主要武器は鐵砲であつた。野田、福島方面でも、天王寺方面でも、ともに鐵砲の撃ち合ひがはげしかつた。九月十二日の戦況を「信長公記」によつて記すと次の通りである。

九月十二日。野田、福島の十町ばかり北に海老江と云ふ所がある。(今は町名となり電車道に面した、ごたごたした町になつてゐる)三好三人衆の殘黨は城廓をかまへて鐵砲をうち出し、てゐる。信長は義昭とともに出陣して、この方面の攻撃に當つた。敵城間近に土手を築き上げその上に大鐵砲(大砲)を備へつけ城中にうち込んだ。また天王寺方面では、紀州方面の狂信者二萬人ばかり立てこもつたが、彼等のうち出す鐵砲は「日夜天地もひびくばかり」であつた。

この情勢を見て、姉川の合戦で痛めつけられた浅井、朝倉の軍勢は、比叡山の僧兵と相呼應して山科に進駐し、信長の歸路を斷つ戦略に出た。

信長、兵の主力を大坂方面にとどめて、手兵をひきつれ、義昭とともに京都に歸つた。浅井、

朝倉勢は信長と京都にて戦ふの氣力も自信もなくなつてゐたので、ともに叡山にのぼり僧兵に合した。

信長は今や、三好一黨、本願寺、それとつながる一向一揆の徒、叡山の僧兵、淺井、朝倉の聯合軍を敵としてゐる。京都と大坂西方とに分散してはゐるが、信長を敵とすることに對しては極めて執拗である。

信長が本願寺を敵とするにいたつた因縁の一つに石山所望の問題がある。石山本願寺は今の大坂城本丸の地にあつた。もと、蓮如の建立にかかり、一度火災にかかつて堂塔多く焼失せるも、永祿八年再建して、法城たる以上に攝津を制壓するの要害となつてゐる。されば信長はかねて、ここを近畿の根城とせんと望んで本願寺にかけ合つてゐたが、もとより本願寺がそれを承引すべくもなかつた。信長は何らかの因縁で本願寺討たざるべからずと考へてゐたのである。

一向一揆との因縁は、のちのくだりに説くとして、叡山を敵とするにいたれる筋道は次の通り。

そもそも比叡山延曆寺は、延曆四年（一四四五）七月最澄この山上に草庵を結びしにはじまる天台宗の總本山であるが、最澄生前、勅願によつて大伽藍を建て王城鎮護の名刹として莊園

あまた領有し、「延曆寺」の勅額を賜うた。ところが、正曆四年（一六五三）にいたり、圓仁、圓珍の兩門徒よりわかれたる山、寺二門の對峙激しくなり、僧兵双方に、起つて争ひ、はては僧官の叙任や法會の修行について不平あるごとに攝關の名家に強訴し、亂暴の餘波は時に市中の良民を惱ませるにいたつた。しかも、その武力と富力と相まつて隠然たる大勢力となり、建武中興に際しては叡山の僧兵は後醍醐天皇をたすけ奉り賊軍と戦つた。

戰國時代となるや、地方の擾亂によつて寺領の横奪荒廢に、さしもの山門の富力も衰へだしたが、織田信長京師に入つて秩序の回復につとめたので叡山の僧俗も信長を佛法擁護の武將とたのんだ。ところが、信長はかねてから叡山の専横とその僧兵の暴虐を憤つてゐたこととて寺領を沒收し、大名の寄進をさへ阻害するといふ態度に出たので、信長は佛敵と見られるにいたつた。恰も淺井、朝倉が兵力をもつて信長に抗争するあり、叡山は主旨こそ異なれ信長に當るにおいて目的は一つとなし、ここに聯合軍の結成となつたのである。

信長とてこの王城鎮護の大本山を無碍に敵とすべきでないかと考へたので、先づ叡山に向つては、この際信長に降るならば山門の領地は悉く返還する、また淺井、朝倉への荷擔はやめること、この兩條を承諾しないなら全山を焼き拂ふ、との意を傳へた。山門は兩條とも斥けた。

時は元龜元年九月。信長は宇佐山に陣をとり、諸將に令して叡山を包圍させた。十月二日、山内に手兵とともにこもれる朝倉義景に戦を挑んだが、義景、おそれて山を下りない。その間にも三好黨に備へて、野田、福島の砦を固め、その大坂方面に蠢動するを抑壓して叡山との聯絡を斷つた。また近江方面には一向一揆の徒が叡山と相呼應して擾亂を起す形勢にあつたので、當時尙ほ小谷城の浅井勢を牽制してゐた木下秀吉をしてその活動を警戒せしめた。とかくするうち、徳川家康も部將石川家成、酒井忠次をして精騎をひきゐ入洛せしめたので、信長の勢は頗るさかんとあつた。

この状態におちげづいた叡山では全く戦意を失ひ、一部の投降者も出で、また山中糧食も乏しくなつた。よつて叡山側からしきりに信長に和を乞うたが、信長は斷じてゆるさなかつた。朝倉義景は困惑の極、將軍義昭に泣訴したので、義昭これを容れて信長に和をすすめた。かくて信長も不本意ながら叡山の圍を解き——或は信長もこれを潮時と見たのかも知れない——漸く、浅井、朝倉と和した。時に十二月十三日。三好一黨、一向一揆、本願寺との敵對もこれにて一時休止のかたちとなつた。

然るに、その翌年（元龜二年）二月になつて、信長は朝倉、浅井との便宜上の、不徹底なる

和解に安んじ得ずとなし、浅井氏の領土近江の諸城に降伏歸順を勧めた。佐和山城を始め他の二、三の城も相ついで信長に降つた。この形勢を見た浅井長政は大坂本願寺に助力を求めた。和議ここに破れて、信長は再び浅井、朝倉、本願寺ならびに叡山を敵とすることとなつた。たまたま、この年五月、尾張の一向一揆が信長の弟信興を攻めて殺したので、信長はいよいよ叡山を討つべきの決心を固めた。

九月、信長は柴田勝家、佐久間盛政をして長政とその軍を小谷城に封鎖せしめ、自身は叡山に進撃して全山焼討にかかつた。焼討の理由は單に前年の和議を破つたのを攻めるためばかりではない、叡山全山の僧衆、天下の嘲をも耻ぢず淫亂貪欲を事とし、叡山の驚なる坂本は僧衆亂行の巷となり、堂も舍坊も荒れはてて、修學勸行すべてすたれたるに憤激したのである。しかも今、浅井、朝倉と結んで重ねて信長に抗争せんとしてゐる、もはや焼くより外に手のつけやうがない。而して強敵を火攻めにするは信長の常法たり、慣用の戦法であつた。

火は九月十二日に放たれた。根本中堂を初め、堂塔伽藍、佛像、經卷、靈社、僧坊、悉く灰燼に歸した。僧、俗、美女、美童、凡そ山門より逃げ、落ちるもの一人のこらず引つ捕へて首を斬る。そのさま、猛獸の餌をあさるがごとし、とある。

かくて、信長は志賀郡を明智光秀に與へ、坂本の城に居らしめた。一向一揆は信長の大業に常にからまりたる眞宗狂信者の全國的騒亂であるが、その最も強烈に暴威をふるつたのは北陸地方においてである。されば、この機會に一向一揆の概念を得ておくとしよう。

一向宗とは、前にも述べたやうに宗外の人の稱する宗名で、宗徒自身は眞宗信徒のうちの本願寺門徒だと思つてゐた。浄土眞宗は申すまでもなく鎌倉時代に親鸞上人のはじめた宗派であるが、その遺族が宗門後繼者の本流をなし、血統相續の本願寺教團なるものを京都に置いた。その本願寺教團が永享年間（二〇八〇年代）には非常に衰へてゐたのを親鸞八世の孫蓮如が専ら北陸において布教し振興した。その放膽にして、しかも機略に富める生活、活動、布教、抗争によつて農民大衆の間に勢力を占むるや、東大寺、興福寺等を先達とする倭佛教徒の反感を買ひ、武士と結んで本願寺派浄土眞宗徒を壓迫した。蓮如はかねて自分の行き方に對し壓迫あらんことを豫想して、その宣言中に「佛法において一命をすてて合戦すべきの由」なる一句を入れてゐた。然し、いやしくもわれから一揆を起すがごときことは生前常にいましめてゐたのであるが、加賀の守護富樫政親の抑壓に抗争して、つひに政親の兵を破るや、これよりはゆる一向一揆の擾亂が全國的にひろまるに至り、三河にあつては徳川家康を悩ました。

第五章 東海平定

其一 家康と信長

信長と家康とは互ひに他の一方のより善き半分である。然し、どちらが餘計に利益を得てゐたかと云へば、信長の方が家康から多くの力を借りてをり、信長の方が得をしてゐた。しかも信長に得をさせてゐた家康自身は、信長以上に奇しき運命に弄ばれ、運命の打開に深刻な苦勞をし抜いてゐる。

すでに、信長がその西上にあたつて、先づ家康と和睦したことを記したのであるから、今更ここで家康を生ひ立ちから語るのも重複のきらひがあるが、然し、これより信長の東海平定を主題とするについては、東海において信長のよりよき半分たりし家康が、いかにして信長に信賴されるだけの實力を收むるにいたつたかを總括しておく必要がある。

家康と信長

家康の生涯はだいたい四期にわかたれる。第一期は信長が桶狭間に今川義元を討つたのち、今川氏の衰微に乗じて、人質生活から解放されて（即ち自分で今川氏を去つて）先代からの居

城岡崎に歸るまで、即ち大まかに見て、その領地三河の一部が今川氏の保護領たりし時代である。年齢にして家康十九歳の永祿三年（二二二〇）までとなる。第二期は、これよりのち天正十年にいたる二十二年間、即ち織田、徳川、聯盟時代であつて、この間、信長は京畿、北陸、伊勢方面を平定してをり、家康は信長をして後方の患無からしめ且つは己を守るために内は一向一揆を鎮壓し、外は武田と和し、今川、北條に當つてゐた。そしてまた信長の近畿平定に積極的に助力しつつあつた。かくて信長の本能寺に自殺するまで、家康四十一歳、天正十年（二二四二）をもつてこの期を終る。第三期は秀吉と和睦して隠忍、秀吉の大業をたすけ、秀吉死するや第四期に入り、自己の地位を急速にきづき上げて、つひに徳川幕府の基をひらいたのである。

さて、これより語る信長の東海平定は、まさに家康が、その生涯の第二期後半に入れる時である。

家康は前に述べたるごとく、永祿四年（二二二一）信長と盟約して、自分は三河以東よりする信長への脅威を防ぎ、または妨げる役目を引き受けた。但し、これは信長のために火中の栗を拾ふにあらず、家康自身の存立のために東方乃至東北方の強豪を制壓し、または籠絡せんと

するものである。

籠絡されたるものは今川氏真であつた。氏真は父義元の代から三河の松平（即ち徳川）は今川氏の下風に立つものときめてゐる。されば、家康が勝手に信長と盟約したのを聞いて家康を詰つた。家康は一時の便法にすぎざる旨を陳辯した。然し、暗愚の氏真も、それで安心はしてゐられなかつた。たまたま三河に向一揆が起つた。三河の一向宗即ち浄土真宗は天福元年（一八九三）北條泰時執権のころ、教祖親鸞が矢作の薬師堂にて説法し一向念佛をすすめたるにはじまり、爾來信徒増え、信仰熱烈を加へ、やがて北陸地方の一揆にならつて不平を一揆によつて晴らさんとするにいたつた。

永祿六年（二二二三）九月、家康は、その臣菅沼定顯をして佐崎（今、静岡縣碧海郡にあり）に城砦を築かしめたが、糧食補給のため同所の真宗寺なる上宮寺の糧を掠めた。寺僧怒つて他の同宗の二寺と謀り、一揆を起し、今川氏に加勢を求めた。家康これを討たんとせしに、吉良義昭、荒川義廣等の重臣はじめ多くの部將が日頃の狂信から一揆に荷擔した。しかも家康屈せず討伐をつづけた。信長これを患ひて和解をすすめ、一揆中の家康の家臣たりし者また歸順したので、翌七年二月和議成立した。和議は成立したが家康の態度は強硬で、つひに領内の本願

寺派諸寺を撲滅した。

家康は次で今川氏眞の三河における勢力を挫いて三河一圓を完全に領有するにいたつた。氏眞は三河を家康に奪はれたが、父義元からの遺産として、尙ほ駿河、遠江の二國を保つてゐる。しかも、その一國たる駿河には、甲斐の武田信玄の巨手が覆ひかかつてゐた。

武田信玄は戰國時代の一偉材である。彼の志は京都にのぼつて、天皇をいただき、天下に號令することであつた。そのためには先づ近隣の強豪を味方とするのを便利とした。その手段は外交政略、その道具は息子と娘、政略結婚が同盟の最も安易なる手段たることは戰國時代の群雄みな心得てゐた。即ち次のごとき關係が成立した。

武田信玄——今川義元（信玄の長子義信と義元の女即ち氏眞の妹と結婚。尙ほ、信玄の妹は義元の夫人であるから、二氏は重縁となつた）

武田信玄——北條氏政（信玄の女を氏政の夫人とした）

北條氏康——今川義元（信玄の肝煮にて氏康の女を義元の長男氏眞に配す）

かくて、武田、今川、北條の三氏は結婚によつてつながる間柄となつた。

この武田信玄が何故に縁者の一員たる今川氏眞を脅して駿河に手をのばしたのであるか。

ここが、いはば戰國の面白さである。信玄は氏眞の凡庸なるに乗じて南下して駿河を併せたままである。而して、それはまた、信玄西上の一つの準備でもあつた。

北條氏とは結婚關係にて提携してゐる。この上怖るるところは背後を狙ふ上杉謙信である。

上杉謙信も亦一代の英雄である。彼は再度入洛して正親町天皇を拜し、禍亂戡定の勅諭を賜はり、進獻するところ甚だ多かつた。もとより他日必ず西上して聖旨にこたへまつるの大志を抱いてゐた。然るに、甲斐の武田信玄が信濃に侵入して、高梨、村上兩氏の領土また危ふくなつたので、この兩氏は援を謙信に求めた。謙信即ち、天文二十三年以後弘治七年まで前後五回兵を信州に入れ、みづからも出陣し、主として川中島において信玄と戦を交へた。このために、謙信も信玄も、ともに西上の機をつかむことができなかつた。謙信はそのうち永祿年間に上野の上杉憲政が北條氏康に追はれて越後にのがれ、謙信を頼れるに同情して、今度は上杉家のために兵を小田原に進め北條氏康を攻めた。勝敗いまだ決せざるに、謙信は信玄が更に信濃を侵さんとするを知つて、自衛のために兵を越後にかへした。彼はその後、氏康と和睦し、越中、能登、加賀を經略し、はるかに中國の毛利氏と盟約して、北方から信長を攻め、やがて京都に入らんと計畫したが、鵬志いまだ成らざるに、天正六年病歿した。時に年四十九。天正六

年と云へば信長四十五歳に當り、秀吉をして中國を征めしめてゐる最中であつた。もし謙信が酒を好まず、卒中にならず、病死しなかつたなら、信長は中國の強豪毛利元親と、この連勝將軍謙信とに挾撃されて京畿から追はれたかもしれないのである。

のこるは武田信玄である。甲斐の信玄は北條、今川の二氏とつながる姻戚關係である上に、武藏、飛騨、越中、上野を劫略してゐるが、尙ほその上にも細心の注意をもつて西上の策をめぐらしてゐる。先づ強敵謙信が北陸方面から京都に入らんとするのを制するため、本願寺と結んで、加能越の一向一揆をそそのかし謙信の邪魔をさせた。次に小田原の北條氏に對しては、安房の里見氏をして背後から牽制させた。また、京都に使者を出して松永久秀と通じ、將軍義昭と信長との間を離間せしめるの策に出た。事實、將軍義昭は表面信長に信賴してゐるやうで内實は信長と十分に融け合ふことができず、むしろ薄氣味悪く思つて、できれば他の有力なる大名と結んで信長に抗争してみようと思つてゐたのである。信玄はまた、今一つの畫策として淺井、朝倉とも好を通じて、もつて信長に當らんとしてゐた。

信玄はこのやうに、あらゆる方面から信長と覇を争ふの素地をつくつてゐたが、畫策するまでもない、やがて、この兩雄は戰場で相まみえるの日に近づきつつあつたのである。何となれ

ば、信玄は今や途を關東から東海にとつて堂々と西上せんとするの態勢をとつてゐたから、必然的に、信長の盟友たる家康と戦ふべき筋道にあつたのだ。

即ち、信玄は永祿十二年、甲斐より進發した。彼は先づ、ひそかに三河の家康を誘つて、遠江の今川氏を挾撃せんとした。同時に、小田原の北條氏に對しても、今川氏を棄てて自分の方に味方せよ、そして、ともに今川氏を亡ぼさうではないかと申入れた。信玄の女は北條氏の當主氏康の長男氏政の夫人であるから、この申入は受けられると思つたのだ。ところが、北條氏康は怒つた。自分の妻は今川氏の先代義元の妹だ、その姻戚關係もある上に、今、何も息子の妻の里に義理立てて今川氏を討つ必要は毛頭無い、と考へた。だから信玄の申入を、きつぱりことわつたばかりでなく、そちらの出やうでは戦争のお相手も辭せず、との決意を示した。信玄いささか斂蛇の形である。今川氏と北條氏とを一べんに敵にまはすことになつた。おまけに徳川家康が北條氏康、氏政の父子と結んで信玄に當らんとしたので、信玄、西上どころのさわざいでない。ここは出直すに限るとばかり、兵を一旦甲斐に引返した。

家康は、どうして北條父子と結ぶやうになつたか。

徳川家康は今川氏の羈絆を脱して三河の領主となつたが、更に東隣の遠江に進出する機會を

狙つてゐた。恰もよし、武田信玄から誘ひかけて来た。信玄は前述のごとく、家康と謀つて今川氏を亡ぼす計畫の下に、永祿十二年一月甲斐を進發したのである。家康は心得たりとばかり同じ月に兵を遠江に進めて今川氏眞の居城掛川城を攻圍し、さて氏眞に談じ込むやうは「もし貴殿が拙者に遠江をゆづるなら、拙者は北條と談合の上で貴殿を駿河の領主として安全に過ごさせて進ぜる、もしこの申入をお聞き入れ無き場合は、必ずや信玄は現に駿河を攻略してゐる餘勢をもつて遠江をも奪ふでござらう」と。氏眞は、今川、北條、武田と、つながる縁に安んじてゐられないことを承知してゐる。そこで赤の他人どころか、自分の領國三河を奪つた家康の言をそのまま信じ込んで遠江をゆづることを承諾した。そこで家康は早速北條氏に談じ込んで「貴殿の親戚今川氏を安全ならしめるためには、どうしても武田信玄を討たねばなりませんぞ、そのおつもりなら拙者がお助け仕らうではないか」と誘ひをかけた。北條氏康は信玄南下して駿河に侵入せると、興津に對峙してゐたので、家康の申出をそっくり受け入れた。よつて、家康は今川氏眞を掛川城から連れ出して、家康の船に載せて、海路、駿河の沼津に護送し北條氏政が、そこで氏眞を迎へて伊豆の戸倉にうつした。この情勢によつて信玄の軍は、興津において家康と氏康の挾撃にあつたのである。そこで流石の信玄も早々甲斐に引き上げたので、

あつた。

家康はかくて戦はずして掛川城を取ることができたので、自分は三河の岡崎から遠江の濱松に居城をうつした。また今川氏眞は約束通り駿河の府中(今の静岡)に還ることができた。北條氏康は興津以東に兵を留めて小田原に引き上げたが、事實上、駿河の大部分を自分の領土に加へたのである。馬鹿を見たのは武田信玄である。何一つ得るところなくして甲斐に引き上げた。そして、家康はまんまと遠江を自分の物にしてつた。戦國時代の國のやりとりで、この一節くらゐ興味津々たるものは類が無い。

信玄が兵を駿河から甲斐に引き上げたのは、もとより北條、徳川聯合軍挾撃の態勢におびえたためでもあるが、他の主因は、越後の上杉謙信が信濃から甲斐の方に南下しはせぬかとの心配があつたからである。而して、今川氏眞も北條氏康も、ともに謙信に對して信玄を背後から襲ふやうに懇請してゐたのだ。だが、謙信はそれほどお人好ではなかつた。弱者に見込まれると義に勇んで兵を動かす謙信ではあつたが、北條、今川の利益のために川中島の二の舞をやるほどの馬鹿でもなかつたのである。

さて、武田信玄は謙信が攻めて来ないとわかると、いよいよ東海道を西へ上るの野望躍動す

るのであつた。もとより北條、徳川勢などに順當の戦で負ける道理が無いとの確信がある。即ち、永祿十二年六月、甲信二國の兵をひつさげて再び駿河に南下し、元龜元年には大井川をへだてて徳川領と對峙した。一方、伊豆に入つて、やがて北條氏政と和し、元龜二年、氏政の第二子を入質としてとり、且つ北條軍二千を甲府に派遣せしめて信玄不在中の固めの軍兵に交へ用ひることとした。

信玄は更に駿河を攻略し、遠江の南部を占領して、高天神城その他の諸城を抜き一旦甲府に歸つた。

家康はこの間、元龜元年上半期は信長を應援して京都、越前、近江方面の作戦に参加してゐたが、その方面の義理をすませると、居城濱松に歸つて信玄に對峙した。信長は家康に、今、信玄と戦ふのは不利だから岡崎に退き給へとすすめたが、家康は武門の名折れとばかり濱松に頑張り、信長に援助を依頼した。同時に上杉謙信に對しては、自分も信長も決して謙信に敵對しないと云ふ誓書を入れ、且つ謙信に贈物をして好を通じた。謙信も家康には多少傾倒してゐたので、依頼に従つて兵を信濃に入れて信玄を背後より牽制した。どうも謙信は一生人のために兵を動かす奇癖があつたやうだ。ほめて云へば仁俠の武將でもあつた。

其二 三方ヶ原の戦

武田信玄は元龜三年秋十月、いよいよ二萬五千の主力軍をひきゐて、信濃路を遠江に出た。別働隊として、山縣昌景は五千の兵に將として三河に入り、やがて遠江において主力軍と合した。同時に、近江の淺井長政、越前の朝倉義景をして美濃方面で信長の軍を牽制せしめた。

徳川家康は十月十三日、大久保忠世、本多忠勝、内藤信成等をして三千の先遣部隊を指揮せしめ見付北方の敵情を視察せしめた。視察の結果は衆寡敵し得べくもなし、信長の援軍をまつて決戦すべし、と云ふにあつたので、この先遣部隊は退却した。

信玄は進んで二俣城を攻撃した。家康は二俣城を救ふために數千の兵をひきゐて笠井町北方まで前進したが、信玄の軍に迫ることは到底不可能であつた。彼は現實に武田勢の優勢なるを知つて、信長に救援を依頼した。その間に、信玄は二俣城の用水施設を破壊したので、城中の守備軍は、つひに濱松に退却した。家康また濱松に退いたことは申すまでもない。

信玄は部將をして二俣城を守らしめ、掛川、濱松よりの徳川勢の逆襲に備へた。かかる間に信玄の別働隊、山縣昌景の軍も三河の東部から城、砦を抜いて二俣の主力軍と合した。時に元龜三年十二月中旬である。もとより二俣に全軍を固着せしむるのが本旨ではなかつた。眼前の濱松城を抜かんがための根城としたまでである。

信長は家康の懇請に應じて、佐久間信盛をして三千に將たらしめ二俣に向はしめた。その援軍いまだ到らざるに、信玄は全軍を進めて三河の東方に進撃しつつあつた。よつて家康は軍議を凝らした。諸將、敵は三萬、味方は八千、出でて戦ふは不利なりと獻策したが、家康は武人の面目にかけてと、出でて迎へ討つべきを命じた。

元龜三年十二月二十二日、武田軍七千人は三方ヶ原に迫つた。家康は信長の援軍を合せて一萬の兵をもつて濱松城を出で、三方ヶ原に陣をとる。

信玄は家康の軍が五分の一の劣勢をもつて單陣横隊に陣取りたるを知り、全軍を魚鱗の陣形縦隊に配置した。その主將は、第一線小山田信茂、第二線馬場信春、第三線武田信玄である。

家康の軍は敵の第一線を敗退せしめたけれども、第二線代つて向へるには難澁し、一時は鐵砲隊の猛射によつて支へ得たるも結局、信玄の猛攻に耐へずして敗退した。家康自から憤激し

て敵陣に向つたが力及ばず、一時は陣中に切腹を覺悟したくらゐであつたが、部下の卒夏目次郎左衛門、槍の石突で家康の乗馬を蹴り付けたので、馬が家康を城中に運び込んだ。戦争は午後四時に始まり、夕方までの間にかたが付いた。六時ごろ家康の一部隊が濱松城内に逃げ込んだ。そのとき家康は、門を閉ちて卑怯と思はれんは心外千萬と、わざと門扉を開けつ放しにして、さかんに篝火をたかせた。武田軍の追撃軍は城門に迫つて、この火炎の明るさに守勢の兵力を過大に推察し、ためらつてゐるところに、徳川軍の兩翼から敗殘兵がおくれて至り、追撃軍の背後から襲撃した。追撃軍はさんざんのでいで逃げ散つた。

家康は部將の言に聽いて、深更に及んで間道より武田勢の背後を襲撃せしめ、奇襲を敢行して、よく奇効を奏した。

さて、信長から派遣されたる後續の救援軍は、家康の軍が信玄の大軍を討ちひしいだと聞いて、途中から引き返した。

信玄は戦後、信長の不信を怒り、また、信長を牽制せざりし朝倉義景の不信を詰つた。

信玄は兵を刑部にをさめて人馬を休養させた。翌天正元年（二二三三）この翌年信長、義昭に代つて天下に號令す。正月、再び西進の途に上り、家康の部將菅沼定盈の守れる豊川右岸の

野田城を攻め一ヶ月にして漸くこれを抜いた。然し信玄は、この際受けた鐵砲傷のために甲府に歸る途中で五十三歳にして死んだ。よつて、武田軍は甲斐に歸つた。

三方ヶ原の戦績を顧るに、家康よくも戦うた。野戰に夜襲に、天下の名將武田信玄をして心膽を寒からしめた。家康この時（元龜三年）三十一歳、信玄この時五十二歳であつた。家康これによつて東海一の弓取の名を得た。信玄はあたら戦傷のため雄圖空しくなんぬ。而して、それはまた、信長をして天下に號令せしむる主たる機縁となつた。

第六章 雄飛

其 一 義昭と信長

武田信玄は東海道から京都に入らんとして戦傷のため死んだ。上杉謙信は北陸道から京都に入らんとして、いまだ志を得ない。

かかる間に世は天正元年（二二三三）となつた。應仁文明の大亂、文明九年（二一三七）に收まりてより、早くも九十六年、概括して戦國時代と稱するも時代のおもむくところ自ら大勢に變局あり、はじめは群雄雜然、混然として領域を接し次第に群雄中の強豪に併合せられ、強豪は互ひに相親しみ、相僞はり、相和し、相戦ひ、何者かが京師に入つて天下に號令せんと争ひつづけてゐた。かくして、戦國時代末期に入つて、尾張の織田信長先づ京畿を平定し、甲斐の武田信玄これにとつて代らんとして挫折した。この時に當つて、西に毛利元就あり、東に上杉謙信あり、信長いまだ心を安んずべからずと雖も、差當つての強敵の災より免れることを得たのである。

信長は將軍義昭を奉じ、みづからは岐阜にあつて天下を睥睨してゐる。而して、義昭は信長に對し絶對の信頼を置いてはゐなかつた。ひそかに、信長にかはつて己を支持する大名を物色してゐた。

信長これを感じ得して元龜元年正月二十三日、明智光秀並びに朝山日乘上人をして五箇條の要求書を義昭に提出せしめた。朝山日乘は法華宗の僧、出雲國朝山の人。かねて皇室の式微をなげき禁裏の修理を念願してゐたが、永祿十一年信長が義昭を奉じて入洛するや、信長に登用されて元龜二年禁裏修築を完成し、且つ式典を復興した。この二人の手に成れる要求書の要旨は

(一) 將軍が諸國へ内書をつかはす場合は必ず信長の添狀を副へること、(二) 從來義昭が下知した裁可はすべて破棄し再考の上訂正すること、(三) 將軍が有功の上を賞せんとするに當り相當の土地なき場合は將軍の意嚮に従ひ信長領内の土地をも與へること、(四) 信長すでに天下の政務をまかされたる上は、誰にてもあれ、將軍の意見をまたすして、信長の意のままに處理すべきこと、(五) 禁中の儀は油斷なくつとむべきこと、以上である。

義昭は、これらの要求を全部承認せざるを得なかつた。かくて政權は完全に信長の手中に歸した。また義昭が信長を排撃する目的で諸國諸大名に内書を送つて聯絡をとることもやんだわ

けである。

この、義昭と信長との間隙に乗じて、一段と兩者の離間をはかつた者は武田信玄である。信玄は西上に先立ち元龜元年四月、將軍に一萬匹の料地を獻じ、將軍の側臣にして足利氏の支流なる一色藤長にも五千匹の地を贈つた。義昭また信玄に心を寄せ、信長の要求を無視するの舉動に出でたので、信長は元龜三年冬改めて十七箇條の諫書を上り義昭を難詰した。その中には將軍諸大名に馬を求めるに事寄せて、諸大名との間に陰謀あることを暴露したる皮肉な一條もある。

信長と信玄との關係は姻戚と敵味方と狐狸のばかし合ひと云ふ複雑微妙な關係である。信玄は三方ヶ原戰役の後、信長の援軍の將平手汎秀の首を鹽漬にして信長に送り、その背信を詰りそののち、將軍義昭に書を呈して信長の五逆を訴へた。佛法王法を破滅する天魔の化身と罵り匹夫の身を辨へず公卿を侮るを指摘し、市民に課役を命じ、且つ財寶をかすめるを責め、臣を殺すこと籠の鳥を殺すがごとしと憤り、勅命に背き奉つて神社佛閣を焼けることを痛嘆してゐる。信長これを聞いて信玄の公人として、私人としての七罪を訴ふ。父信虎を追ひ、甥今川氏眞の國を乗つ取る、などの罪を擧げたる中に、「信玄剃髮染衣の姿として人の國を貪り、民

を害し、内には破戒の業をなし、外には五常を背く、たとへばまいす（賣僧）の僧のごとし」と云ふ愉快な一句もある。

義昭自身、かねて信長をはばかつてゐたこととて、信長が家康を助けて信玄に當るの間、信長討伐を圖り、近江の堅田、石山に壘を構へて四方の士の來援を促した。よつて信長は先づ義昭に書を送つて、「信長ゆめゆめ公儀に對し少しも疎略を存ぜざる」旨を申入れたが、義昭しきりに洛中、洛外の人民に矢錢課役を命じて怨を買ふを見て、信長「惡政を救ふため」との名分によつて天正元年四月、自ら兵をひきゐて上洛し堂塔を焼いて威を示したので、今度は義昭の方から信長に和を請うた。

然し、すでに兩者の間には到底相親しみ難き感情をかもしてゐた。信長萬一に備へて佐和山城主丹羽長秀をして琵琶湖上に巨船（長さ三十間、幅五間）を泛べしめ、迅速に大軍を京師に入れる準備を整へた。果せるかな、この年（天正元年）七月、義昭宇治に兵を擧げたので、信長湖水を渡つて二條城を攻めた。義昭の軍一たまりもなく敗れ、義昭は普賢寺に入つて信長に降つた。信長、秀吉をして義昭を警固せしめ、のち、河内の若江（中河内郡）に放ちて庶民とした。義昭は勅によつて將軍職を剝がれた。時に天正元年七月。足利將軍、十三代百八十年に

してほろびた。信長時に四十歳。

足利氏は、ここに亡びた。最後の將軍義昭は自己の力を圖らず大勢を察せず、陰謀畫策にふけり、しかも衆怨の的となつてゐた。「貧乏公方」「惡御所」は彼の受けたる惡名であつた。然し一庶民となつた義昭は再び將軍たらんとの夢を見つづけてゐた。彼は、こののち尙ほ運命打開の努力をつづける。

其二 長篠の役前記

元龜四年七月改元して天正元年となつたのであるが、この年七月、足利義昭一庶民におとされて、信長はもはや頭を下げねばならぬ將軍もなく、京畿の治安も固まつた。氣がかりなのはまだ淺井、朝倉二氏がすぐ眼近に敵意をひそめてをり、岐阜と京都との中間をおびやかしてゐることと、一向一揆がうるさいことと、それから、武田信玄の子勝頼が甲信二國の精銳の軍を擁して、しきりに美濃、三河、遠江をうかがつてゐることであつた。

信長は先づ、淺井、朝倉を片付けねばならぬ。ことに信玄が、かねてから淺井、朝倉と通じて信長を挾撃せんと策してゐたのであるから、信玄亡きあとの武田氏に當る前に手近の、この兩氏を徹底的に滅ぼしておく必要があつた。

信長はこの年（元龜四年）四月信玄が戦傷で死んだあとは、力を淺井、朝倉討伐に傾けることができた。即ち、八月（天正元年）朝倉義景の軍を近江國伊香郡刀根坂の戦に殲滅せしめ、

逃ぐるを追うて越前足羽郡一乗谷城に火を放ち、自刃せる義景の首を斬り、且つその一族を悉く殺した。一乗谷城は朝倉氏の居城である。かくて、長く織田氏を悩ましてゐた朝倉氏は全く滅んだ。

次は近江小谷の城主淺井長政。長政は前に記せるごとく信長の妹お市の方を夫人としてゐたが、朝倉氏との前々からの因縁によつて共に信長に抗してゐた。今や信長は最後の斷を下すべく、天正元年八月、小谷城を攻めて一舉にしてこれを陥れた。長政は死にのぞんでお市の方をさとして信長の許に歸らせた。信長は悦んでお市の方を迎へたが、但し、長政との間に生れた長男は内緒で殺して了つた。お市の方は、のちに柴田勝家の夫人となつた。實は秀吉がほしがつてゐたのを、勝家にとられたのである。

信長は十一月、更に河内の三好氏の殘黨を滅ばした。

天正二年（一二三三）信長四十一歳の春を迎へ、正月諸將士と岐阜城に飲宴した。酒三行にして信長「余に佳肴あり、諸君に饗せん」と、一つの函を差出した。將士いかなる佳肴かと視入る。信長蓋をとる。中には金箔を塗つた首三つ、一は朝倉義景、のこるは淺井父子の首であつた。一同これは好物、などとはやした、とあるが記すだに不愉快な趣味ではある。戦國時代

の武將はいつたいに人間の首など張子の狗ほどにも思はなかつた。谷崎潤一郎氏の「武州公秘話」といふ小説は戦國時代の武將を題材にしたものだが、その中に、城中の女どもが敵の生首を洗つたり薄化粧してやつたりすることが書いてある。信長の場合にはちとあくどい。「この兩家には随分惱まされた」とは信長その時の述懐であるが、かうまでせねば怨がはれなかつたとすれば、氣持の上では信長の負である。

信長はその後、伊勢長島の一向一揆を鎮定し、男女二萬人を柵中に押込めて焼き殺した。また大坂石山の本願寺の信長に叛意あるを見て近邊に放火し、その出ばなを挫いておいた。

さて、最後に一つ氣がかりなのは信玄の子勝頼であつた。勝頼は歌舞伎の世界では、うつとりさせられるほどの美男であり優男であるが、ほんとうは父の血を受けて豪宕の氣性を備へた好武將であつた。但し、信玄の部將必ずしも勝頼に心服せず、ために全軍の統制に缺くところはあつた。

勝頼は信玄の死後、その遺命によつて深く喪を秘して威望をつなぐことに苦心した。勝頼の夫人の兄に當る北條氏政すらも、信玄死せりとの風説をたしかめるために戦傷の見舞として特使を遣はして實否を探らせた。武田方ではにせ者を信玄と偽はつて急場をしのいだ。信玄の容

貌は畫像によると魁偉であるが、戦國時代には似寄りの面構の武將があり得たやうである。

勝頼は父信玄の壮志を繼いで、自分が京都にのぼらうとの雄圖やみがたく、甲斐にあつて畫策し準備しつゝあつたが、その間、徳川家康はさきに信玄に奪はれたる三河、遠江の領土を大部分恢復してゐた。勝頼は兵を出して妨げたるも及ばなかつた。家康に奪回された城の一つに長篠城がある。もと、今川義元の居城であつたが、義元死後家康の手中に歸した。元龜二年武田信玄これを降して、信玄西上の一據點となつてゐた。然るに、天正元年七月、即ち信玄死後三ヶ月目に、家康これを攻めて奪回したのである。

勝頼はこの年(天正元年)十一月、みづから一萬五千の兵をひきゐて駿河を経て遠州に入り大井川をわたつて南下して諏訪原に築城し、以て他日西上の據點とした。諏訪原は可成り廣い高原で(現在は軍用地と茶畑になつてゐる)その北端に立てば遠近の山河を一望に收めることができる要害の地である。

明くれば天正二年。二十九歳の武田勝頼は正月、信州方面から美濃を侵して信長の膽を冷させ、二月岩村に侵入して明智城を陥落させた。岩村は信、參、濃三國の境に近き天險の地(盆地にして、しかも交通至便)であるから、信長はこの城を固守せんとしたが、援兵いまだ到

らざるに城は武田軍に奪はれた。(のち、信長再び奪回して森蘭丸に與へた)

勝頼はついで五月、さきに築城したる諏訪原から更に西進して掛川の南方なる高天神山上の高天神城を攻めた。この城は家康の居城濱松を守る第一線とも云ふべき肝要の地であり聞えたる天險の城なので、家康はこれを確保せんとし、信長またみづから兵をひつさげて援けに出かけた。援軍到らざるに城は勝頼軍に屈して開城した。信長はおくれて来たのを残念がりつつ、家康に軍用金として黄金一ぱい詰めたる革袋二つを贈呈した。

勝頼は高天神城を抜いて氣大におごり、家康、信長、怖るるに足らずとの自信を抱くにいたつた。たまたま、當時淡路にちこまつてゐた足利義昭(彼は天正元年、一庶民となつてゐる)は、武田勝頼と徳川家康を和睦せしめてともに信長に當らしめ、同時に、上杉謙信に對しても信長打倒をすすめてゐたので、勝頼も京都入りの機運到来とひそかにほくそ笑んでゐた。かくして、次の戦場、長篠に妖雲早くもたてこめてゐる。

長篠の戦は武器と戦争の方法に新局面を開いた劃期時の戦争である。その意味を専ら「大日本戦史」によつて語らうと思ふのであるが、その前に特にこの戦争に用ひられたる鐵砲について詳説しておく。

鐵砲の傳來については前に大略を記した。鐵砲が關東方面に傳はつた筋道は、種子島の商船が大風に送られて伊豆に漂着し、その乗員の一人によつて傳へられたと云ふ説と、相模の山伏が種子島から取つて来て北條氏に獻じたと云ふ説とある。また、將軍義輝が永祿二年正月、鐵砲と、火藥の製法一巻を上杉謙信に贈つたことは上杉家の古文書にある。

信長が鐵砲を手に入れた筋道は、天文十八年、近江の國友村の鐵砲製造人から買入れたのが初であることは前に記した。國友村は當時淺井氏の領分内であつたが、信長が天正元年に淺井氏を滅ぼしてからのちは、秀吉(羽柴の姓を名乗る)が長濱城主として鐵砲製造を奨励し、製造元國支藤二郎に百石扶持を興へて保護してゐた。他國の大名からの注文ありたる場合は、秀吉の下知なくては引受けられないことになつてゐた。

然らば、關東方面の戦争では、いつごろから鐵砲が用ひられたであらうか。

弘治元年(二二一五)鐵砲傳來後十二年目)の川中島合戦には武田勢に鐵砲隊があつた。元龜二年(二二三一)傳來後二十八年目)三月、武田信玄が當時家康の一屬城たりし高天神城を攻めた時、城中二の丸から鐵砲を弓と交へて撃ち出した。戦記の用語も「弓鐵砲」とあるから純粹の鐵砲隊ではなかつたらしい。翌、元龜三年の三方ヶ原の戦争では、徳川軍が敗退したの

ちの犀ヶ崖の夜襲に三十挺の鐵砲を交へて敵を惱ました。
 このやうに、織田、徳川はしきりに鐵砲の活用に心をを用ひてゐるのに、武田軍は信玄以來の兵法と將士の歴戰の効に頼りすぎて、この新時代の新武器に多く留意しなかつたやうである。
 近畿にあつては當時すでに大部隊の鐵砲隊が戦つてをり、大坂石山の本願寺は七、八千挺の鐵砲を備へてゐた。天正七年（二二三九）秀吉の築いた姫路城には天守閣の内部に壁で圍つた一種のトーチカがあつて、銃眼をつくり、城中に攻め入つた敵を狙撃する設備になつてゐる。これによつて見るも攻守とも鐵砲の活用は、よほど考慮されてゐたやうである。

其三 長篠の役

徳川家康は元龜三年十二月、武田信玄の大軍と三方ヶ原に戦つて大敗し、奇襲によつて些か氣を吐いたものの、つひに武田勢の敵でないことを痛感した。然し、信玄もまた家康の勇戦ぶりに舌を卷いた。

家康は、この戦では信長の助を得るにいたらなかつたが、もうこれからは武田と戦ふには信長と一緒にやるに限ると決心してゐた。信長も家康を助けて、ともに武田を叩きつけておかないと京都にも岐阜にも安心してをられないのである。

ただ、問題は、信玄の子の勝頼が、またそれにしたがふ將卒がどのくらゐ強いか見當がついてゐないことである。然し、信長はすでに鐵砲隊の猛訓練をやつてゐたこととて、この新武器の活用で勝算を立てられないこともあるまいと思つてゐる。

一方、武田方でも、鐵砲を無視してはゐなかつた。信玄ののこした戦争方法の條目中にも弓、

槍、鐵砲の用意肝要なること、及び隣國のことを考へ合せて、このころ鐵砲隊の油斷が見えるのは心配だ、との意味が記してある。この心配の種は勝頼に持ち越されてゐるのに、勝頼は高天神城を抜いて以來いよいよ慢心して、織田、徳川勢の鐵砲隊の訓練について餘り注意しなかつた。

天正三年（二二三五）五月八月、武田勝頼は甲斐、信濃、上野の兵一萬五千をすぐつて三河經略にかかり、先づ三河國設樂郡長篠村なる長篠城を包圍した。本陣を城北の醫王寺山に置いてゐる。

長篠城は簡素な築城に成ると雖も、大野川、瀧川二川會する股に迫つて斷崖の上に築かれ、城主奥平貞昌、家康の嚴命によつて死守してゐる。

武田軍これを攻めること頗る急。守備軍劣勢なるも善く防いだ。武田軍も奥平軍も鐵砲を使用した。また互に、敵の銃丸をふせぐために竹束を用ひた。竹の背はよく當時の彈丸をふせぎ得た。守備軍は武田軍を引きつけておいて射撃した。攻撃軍は井樓を組み立てて城壁に迫つたが城中から撃ちまくつて近寄らせない。また城中からは大砲を撃つてゐる。大砲は日本では當時初めてつくられた新武器で、この戦において大いに威力を發揮した。しかも武田軍の猛攻に

よつて城廓次第に落ち、十四日には兵糧庫を落された。この日夜半、城中より、鳥居強右衛門、城主の命を受け全城の輿望を荷ひ、ひそかに脱出して十五日晚岡崎に着き家康に軍狀を告げ、來援せる信長にも謁して援軍の到ることを確め、十六日城外に歸つてつひに捕へられた。武田軍に「望無きゆる降伏せよ」と云へば助けてやる」と云はれ、城下に立つて「援軍三日の中に必ず來る、善戦せよ」と叫んで直に殺された。

十八日、家康、信長、來り援けた。武田軍圍を解いて退き、長篠城外設樂原に對陣す。

設樂原の戰爭、即ち長篠の戰である。設樂原は豊川（豊橋のほとり）で海に注ぐの上流、長篠城の西方に當り、山岳と豊川上流との間に位する高原地帯である。長篠城の攻略に失敗したる武田軍は二十日に本陣を醫王山から瀧澤川をわたつて柳田に變へたが、武勇におごり柵一つ造つてゐない。兵數凡そ一萬五千、十三段に陣を構へた。

これに對する織田、徳川聯合軍はいかに。織田軍は極樂寺に陣して兵數凡そ三萬人、徳川軍は茶磨山に陣をとつて兵數凡そ八千人。この聯合軍は小川を前にして柵を井型の格子に組み、一柵毎に間隙をおいて立てならべ、隙間をふさぐやうに後にも一列、同じく間隙をおいて同じ形の柵を立てならべた。これを馬防柵と云ふ。

信長は近畿諸國から鐵砲を集めて、一萬人の銃手から三千人をよりすぐり、これを柵ぎはに配列した。

家康の一支隊は酒井忠次將となり、二十一日、迂回して、その一部は薙巢に迫つた。この方面の武田勢は崩れ立つた。

武田軍は二十二日、全軍、聯合軍の正面に向つて突撃した。多くは騎馬であるが、馬が馬防柵におじけてよう進まない。信長軍はその隙をねらつて、三千挺の鐵砲が三隊にわかれ、千挺づつで代るがはる一齊射撃をつづけた。敵、突進し來れば柵の内より撃ち、崩れ立てば外に出て撃つ。

武田軍散々に撃ちまくられ、名將勇士あまた討死し、やがて全軍敗退した。

この戦争において、織田軍は専ら鐵砲隊で敵を撃退し、その他の歩兵も騎兵も合戦の手合せを一切してゐない。兵力を損せずして快勝を得てゐる。徳川軍は亂軍亂闘の裡によく敵を惱ました。わけても大久保七郎右衛門、同彦左衛門兄弟の目ざましい奮闘ぶりには見てゐた信長も感じ入り「さても家康はよき者を持たれたり、われは彼等ほどの者をば持たぬぞ、あの者どもはよき膏藥にてあり、敵にべつたりと付てはなれぬ」と評した。彦左衛門「三河物語」に書

のこしてもゐるが、のちのちまでもこの時の戦功を語つて自慢した。

武田勝頼はつとめて平氣のていよほひつつ、敗軍をまとめて甲斐に退いた。甲斐に歸つてから、鐵砲尊重の戦備を進めて雪辱戦を計畫してゐたが、つひにその志は成らなかつた。

信長の大敵が今一人のこつてゐるとすれば、それは上杉謙信である。信長は長篠役の戦況を謙信に報告することを忘れなかつた。

この戦争は信長よりも家康にとつて意義深き戦争であつた。「信長公記」の筆者は、家康が年來の愁眉を開いて、武勳をかがやかせること、「あだかも照る日の輝、朝露を消すがごとし」と記してゐる。

信長は六月二十六日京都に上つた。さうして、七月三日には宮中に御機嫌を伺ひ奉り、禁中にての御鞞の儀を拜觀し、天盃を拜領した。

七月六日には妙顯寺の能を見て、十七日、岐阜に歸つた。

右は戦争つづきのひまに、信長が宮廷に伺候し、且つは悠々閑日月をたのしんだゆとりのあつたことを見るために、「信長公記」から抄録したのである。

其四 信長と謙信

上杉謙信、彼は不幸なる英雄であつた。彼の不幸とは西上の志を伸ばし得なかつたことを意味するのであるが、彼の西上を終始邪魔したものは信玄と信長の牽制外交であり、その道具につかはれたるものは一向一揆であつた。

謙信は足利將軍の下に京師にあつて全日本に號令せんとしてゐたから、永祿五年には十一代將軍義輝の一字を受けて、政虎と改名した。彼は關東方面に出でんとして常に武田信玄、北條氏康に阻まれ、北陸を経由して京都に入らんとしては越中の平定に長い間苦しんだ。越中では信玄の一向宗徒操縦が効を奏して、一向一揆が謙信を惱ませてゐた。

然るに、天正元年四月信玄死せるのちは自由に北陸を經營し得るやうになつた。ついで淺井、朝倉がともに信長に滅ぼされたので、一向一揆の徒は政治上の後援者を失ひ、もはや大名の使喚によつて謙信を惱ませることをしなくなつた。かくて、越中は謙信の勢力下に置かれたが、

加賀、越前においては更に最後の強敵と對立せざるを得なかつた。それは織田信長である。

信長は越前經略に當つて消極的に一向一揆を活用した。一向宗僧侶は土民の支持によつて渡世を營み布教に従ひ、土民は田畑その他の所得の半分を僧侶に上納して、あと半分をめぐりめいの所得としてゐたが、これは土民としては大名政治の下にあるよりも割のよい生活であつた。従つて生活たかまり、氣おごり、つひには僧侶の云ふことも聞かなくなり國內の秩序はまったく亂れて了つた。よつてこの機に乗じ、信長兵を越前に入れて一揆を鎮定した。そして、越前を柴田勝家、前田利家、佐々成政、金森長近等に分封し、勝家をして北陸の總轄たらしめた。越前平定さるるや、次で兵を加賀に進めた。これは一向一揆掃蕩と、謙信西上阻止との二様の意義を含んでゐた。

上杉謙信は天正五年、義昭から信長討伐を要求され、また毛利元就からは信長を挾撃せんと申し入れを受けたので、この年九月能登を平定した。かくて、やがて京都に上らんとした態勢をとつてゐた。信長は謙信の實力を知つて怖れてゐたので、長篠の役で叩きつけた當の相手の武田勝頼に對し、共に謙信を討つことをすすめてみた。勝頼憤慨してそのまま謙信に通じた。信長は自分の弱味を暴露されたやうなものである。謙信いよいよ京師にのぼることとなつた。

然るに、謙信は天正六年三月十三日、出立に先だつこと二日、四十九歳を一期として中風で死んだ。寒國の武將とて、お酒の量が過ぎたのである。惜しいかな。

第七章 安土城主

其一 信長の周囲

信長の周囲

上杉謙信死後の織田信長は、もはや絶対安全となつたであらうか。天下の形勢いかに。

信長は天正四年正月、城を江州安土山に築いた。この安土と云ふ所に居城をうつしたることこの城に、この時代の美術の粹をあつめたと云ふことは信長生涯の一區切であり、日本史上の一時代をつくる。信長の安土にある間を安土時代と稱し、これにつづく桃山時代とつないで安土桃山時代とも稱してゐる。そこで、今、この一つの時代に入るに先立つて、信長の周囲を見わたし、當時の日本はいかなる状態にあつたかを考へる。

先づ信長自身の支配力の及ぶ領土はどのくらゐであつたか。永祿三年、二十七歳にして今川義元を討つた年に、ほぼ尾張一國を領有し、そののち四年間美濃の經略に努力して、美濃を平定し岐阜に居城をうつしたのが永祿七年、三十一歳の年であつた。それから近江南方の六角氏を追ひ、京都に入り、近畿をしたがへた。この間、宗門にして大名以上の勢力ありし比叡山延

曆寺を焼いて禍根を絶つた。

元龜元年三十七歳にして、姉川の戦に浅井、朝倉二氏を討つた。ついで伊勢を平げ、北陸を抑へ、一向一揆を鎮壓した。

かくのごとくにして、今、天正四年の正月に領國を檢すれば、山城は王城の地、京師まつたく信長の威令行はれ、大和、河内、和泉、伊勢、尾張、近江、美濃、飛驒、若狹、越前の諸國に、紀伊、加賀の各一部を領有してゐる。即ち、いはゆる群雄割據時代の末期において、最も雄大なる版圖を領有してゐたわけである。

この時に當つて、他の日本諸國はいかなる形勢にあつたか。

甲斐、信濃には武田勝頼再起を圖つて軍備建て直しに汲々たり。

武藏、相模、伊豆、下總にかけて關東一帯の地は北條氏康、いやしくも輕舉妄動せず隠然たる大勢力となつてゐる。

越後、越中、能登一帯の北陸諸國は上杉謙信のあと血のつながる長子なきも、景勝あとをついで父の威望いまだ衰へてゐない。

徳川家康わづかに駿河、遠江、三河を領すと雖も、その戰鬥力のすばらしさは長篠の役に信

長をして感嘆せしめてゐる。

眼を西部日本に轉すれば、備前に赤松氏、宇喜多氏嚴然たり。但馬、因幡の山名氏、出雲の尼子氏、いづれも勇士を抱へて、睥睨しつつある。

而して、備後以西の諸國が今や、大内氏にかはる毛利元就の威力の下にあり、はるかに信長の一大敵國となつてゐる。

四國は土佐の長曾我部元親、表面は信長に心服してゐるやうに見せて、息子の名に信長の信をとつて信親と名乗らせてゐたけれど、いづくんぞ知らん、かねてから本州進出を計畫して、その機をうかがつてゐるのだ。

薩摩の島津氏は九州の群雄を壓し、大村、松浦の諸氏は勢力すでにふるはなかつた。

然らば、すでに近畿を平定してゐる信長が何故に城を京都か大坂に定めなかつたであらうか。實際、信長は大坂の石山本願寺をもつて、他日全日本に號令する據點としようと念がけてゐたのである。秀吉の大坂城を築いたのは一に信長の遺志計畫を繼承せるものと考へられる。

信長の周囲

今、信長が安土を撰んだのは、北陸の武田氏南下に備へると云ふことが大なる原因となつてゐた。北陸を念頭に置き、王城の地を遠慮し、石山本願寺を即刻立ちのかせるための無用の争

を避けるとすれば、中間の居城として、安土は手頃の位地にあつた。

信長は天正三年、四十二歳、家督を子の信忠にゆづり、自身は岐阜城外の佐久間信盛の邸にうつつた。

この年十一月四日、信長は大納言に任ぜられ、ついで右大將に進められた。

其二 安土築城

信長は天正四年正月月中旬から安土城の普請にとりかかつた。普請奉行は丹羽長秀である。長秀は信長の部將として戦功あり、信長、兄の信廣の女を養女として、長秀に嫁せしめた。普請奉行たるはかかる因縁からで、城の設計などについては多く信長自身の意嚮が加はつてゐたことはもちろんである。

安土は琵琶湖東方中央部に突出せる小半島をなせるあたりで湖に面して安土山がある。安土城はこの山上に築かれた。普請奉行丹羽長秀は信長より一歳年下、幼時から信長に仕へ、軍功を積んで永祿五年、二十八歳で評定衆となり、また、信長の兄信廣の女を夫人とした。

工事には、尾張、美濃、伊勢、三河、若狭及び畿内諸國の諸侍並びに京都、奈良、堺の大工、諸職人を召寄せた。瓦焼には唐人一觀に命じた。一觀は明の福州の人、肥前平戸に來りて瓦焼の名工との名が聞こえてゐた。瓦はもと、飛鳥時代に百濟から職人が來朝して傳へたもの

だから、この時代にも唐人の瓦焼がすぐれた技術を備へてゐた。大石は附近の山々から切り出した。千人乃至三千人が一つ一つの巨石を山に運び上げたが、中にも蛇石と稱せらるる大石は一萬餘人が夜晝三日かかつて麓から山上に引き上げた。また建造物の一部分は、この築城と同時に京都二條城を信長の居邸として改築するに當つて、二條城から運ばせたのであつた。

かくして足掛け四年、天正七年五月に天守が落成したので信長ここに移り住んだ。

凡そ日本の城廓は戦國時代に入つて急速に進歩し、人工の妙を盡して要害の居城をつくるにいたつた。即ち大名が領國の政治經濟軍事上の中心地に大城廓を構へて、その下に城下町を現出せしめたのである。安土城はその代表的なるものであつた。その安土山上に築かれたるは、山險による城から平野に巨城を築くにいたれる城廓變遷史上の一途上にあるものと見られる。

安土城の外観は、七層の天守閣を中心として、本丸、二の丸、臺所丸、八角臺などの建物が並び、南麓に秀吉と家康の居館があつた。天守閣の威容はすばらしかつた。

天守閣の内部は、あましまし次の通りである。

最下層は石藏で、この部分の高さ十二間。二重め。石藏の上、廣さ、南北二十間、東西十七間、高さ十六間、柱數二百四本、本柱の長さ八間、太さ一尺五寸六分四方。御座敷の内は悉

く黒漆。西十二疊敷には狩野永徳墨繪にて梅を描く。永徳は狩野家五代目の巨匠。狩野家は即ち狩野派とて、漢畫を日本化する新畫風の流祖である。詳しくは、のちに文化史上の信長を説くために明かである。このお座敷の金具は悉く金。別に書院あり、遠寺晚鐘の景色を描く。次四疊敷、柵に鳩の繪。次に十二疊敷、鶯をゑがく、即ち鶯の間である。その次八疊敷、奥四疊敷にて、雉の子を愛する繪がある。南十二疊敷には唐の儒者たちの繪をゑがく。又八疊につづいて東、十二疊敷。次、三疊敷。その次、八疊敷にて御膳をととのへる所である。その次、八疊も同じ。六疊、納戸六疊、いづれも繪所は金を用ふ。北の方に土藏があつて、その次、二十六疊敷の納戸。ほかに、六、十、十二、納戸七つ、その下に金灯爐を置く。

三重め。十二疊敷に花鳥の繪あり、花鳥の間と云ふ。別に四疊敷の御座の間があつて、同じく花鳥の繪。次南八疊敷には賢人の間に、ひょうたんより駒の出でたるをゑがく。その東、麝香の間八疊敷、十二疊敷が御門の上に當る。次八疊の間には呂洞賓と申す仙人並びにふたつの圖あり。北二十疊敷には駒の牧の繪あり。次十二疊敷には西王母の繪。西側には繪なく二段になつた廣縁がついてゐる。つづいて二十四疊の物置の納戸。入口に八疊の間、この層、

柱數百四十六本。

四重め。西十二間に岩にいろいろの木をゑがく、即ち岩の間である。次、西八疊に龍虎の戦の圖がある。南十二間には竹をいろいろに描く、竹の間である。次十二間に松ばかりをいろいろに描く、松の間である。東八疊敷には桐に鳳凰の圖をゑがく。次の八疊敷の圖は許有耳を洗ふところと、巢父牛を牽いて歸るをゑがく、ならびに兩人出生の故郷の圖。次の小座敷は七疊敷、金泥ばかりで繪は無し。北十二疊これにも繪無し。次十二疊敷、このうち、西二間のところにて、まりの木を描く。次八疊敷庭子の景色、即ちお鷹の間である。柱數九十三本。

五重め。繪は無し。南北の破風口に四疊半の座敷西方にあり、小屋の段と云ふ。

六重め。八角四間あり、外柱は朱塗、内柱は皆金色である。釋迦の十大弟子、釋尊成道御説法の次第をゑがく。また縁輪には餓鬼ども鬼ども多く描き、縁輪の端板には鯨鯨、飛龍をゑがく。高欄、擬寶珠の彫物がある。

七重め。三間四方、座敷中皆金づくめの裝飾。外側も金。四方の内柱には昇り龍下り龍。天井には天人御影向のところ、座敷の内には三皇、五帝、孔門十哲、商山四皓（西漢の時、高

祖に仕へるをいさぎよしとせず、商山にかくれた四人の白髮の老人）七賢人等をゑがいてある。柱は漆……。

以上が安土城の建築當事者と、城の結構のあらましである。建築の進むにつれて關係者にほろびが出た。「いづれも、粉骨の働によつて或は御服或は金銀唐物を拜領したとある。羽柴秀吉は大軸の繪をもらった。

ところで、普請奉行が信長身内の重臣たる丹羽長秀であることは當然として、當時信長の重臣たり、しかも日本一の築城の大家として聞こえたる明智光秀はこれに參畫しなかつたであらうか。

「明智記」に據ると、光秀は天正四年二月、急に信長に召された。信長はその時すでに安土の地理を按じ、構造の大略を作り上げてゐた。即ち光秀に示してその意見を徴した。光秀曰く、「城廓の配置、塹壘の結構、まことに兵家の理をあらはして些の遺漏もありませぬ。但し、この中央部に天守閣をお築きになりますれば錦上花を添へるでござりませう。私は先年諸國を周遊仕りましていろいろのお城を見てまはりましたが、安房國館山の里見左馬助義豊の子義弘は三層の天守を建て、周防國山口においては大内義興が同じく三層の天守閣をつくつ

てをります。御當所はまさに名城なれば仁義五常の聖訓によつて五重の高閣を組み上げ給ふ
 においては、まことに宇内第一の壯觀かと存じ上げまする」

信長これを聞いて大いに喜び、それに二重を加へて七重の天守閣を造つた。因に、城の天守
 は「四」は「死」に通ずると決して四重には造らないものである。

信長自身もこの城は自慢であつた。そこで竣工後、岐阜の玄興と云ふ僧に命じて「安土山之
 記」を作らしめた。その末節に曰く「この時にあたつて市人市に歌ひ、野老野にはやす、行者
 路をゆづり、耕す者畔をゆづる、堯舜の民、文武の民といへどもこれよりゆづるべくもあらず
 加ふるに王道の衰を起し神社佛閣の破を修し斷橋をつなぎ嶮路を平にす、これ故に四夷貢を獻
 じ來復す」と。信長、お禮に百兩と小袖三重を贈つた。

安土城に居をうつしたる信長は、更にこの城下に城下町を現出せんとし、先づ寺院を城の近
 傍に集めた。ことに、近江佐々木の名家で宇多源氏の末流たる佐々木氏の菩提寺、淨嚴院を安
 土に建立させて、これを國內淨土宗の本山たらしめたるは、土民の信頼を得る上に大なる効果
 があつた。

さて、安土に立派な町をつくるためには移住者に特典を興へ、且つ住みよき市街とせねばな

らなかつた。そこで信長は天正五年六月、安土町の居住者について次のとき意味の條々を定
 めて廣く知らしめた。

一、安土は樂市とする目的で、諸座（「座」は専門店）諸役、諸公事等一切無税とする。

一、往還の商人海道を上下する者、當町にて宿をとらせる。但し、商品たる荷物以外の物は
 荷主自身で處理せよ。

一、普請や傳馬に勞役を一切申付けない。但し、已むなき公用の際は町人が合力すること。

一、火事の際、放火なら火元に責任はないが、自分で火を出した場合は追放する。但し事情
 をよくしらべて輕重によつて處置する。

一、罪人と知らずに同居させるのは別に咎めない。知つてゐて隠すと罪に問ふ。

一、盗品をそれと知らずに買ふのは罪に問はぬ。盜賊と關聯してゐる場合は、その品は持主
 に返せ。

一、分國（信長領分）中に徳政（借金棒引）を行ふ場合でも安土だけには行はない。（貸方
 になるべき商人を安心させるためである）

一、他國よりの移住者も前からの居住者も一切平等に扱ふ。給料を出して雇ふた者をは公役

につかせることはしない。

一、喧嘩口論、押賣押買、宿の押借など一切してはならぬ。

一、説諭、處罰等は福富平左衛門尉、木村次郎左衛門尉兩人に届けた上で行ふ。

一、安土に居住する限り奉公人、客人と雖も一切諸役を課せない。但し公用に例外はある。

一、馬市は安土に限る。

以上、犯すと罪に處せられる。

これによつて、かかる定のない城下町がいに町人を不安ならしめてゐるかもわかり、信長の安土繁榮策のいかに行き届いてゐたかをも知ることができぬ。

天正九年は、右の條々を示した年から四年目だから、もうだいぶ町も繁盛してゐた。この年正月、信長は祝儀として、町人に雁、鶴をわかちあたへた。このころはまた、調馬、爆竹、萬燈（かはらけに灯をとぼした棒を並べ立てる）などで町人をよろこばせた。

もちろん地勢から考へて、安土が大都市になることは望まれなかつたとしても、岡崎や堺に雁行するくらゐの町にはしようとの計畫であつたと思はれる。そしてまた、大坂を目ざせる信長が、今日の長期戦を豫想して、全國平定の時まで、まだだいぶ年月がかかると覺悟してゐた

ことも察せられる。さればこそ安土城は速成の巨城にして、しかも半永久的の設備と裝飾とを加へられてゐたのである。

惜しいかな、信長は天正十年には死んでゐる。あとは焼かれたり、運び去られたり、安土はもとの寒村になる運命にあつた。

其三 謙信亡きあと

越山あはせ得たり能州の景、これは謙信、能登を征したる際七尾あたりで詠じたらしい詩の一句である。さもあらばあれ、家郷、遠征をおもふの情は深かつたであらうか。謙信客死せるあとの上杉家には正統の嗣子無く、家庭はあつぎでもめてゐた。謙信生涯女色を避けたる報いである。

上杉家は景虎と景勝との家督争でもめた。景虎は北條氏康の七子。即ち氏政の弟初め武田信玄の養子となり、のち上杉謙信の養子となる。妙な身の上だが、どちらも北條氏の策略結婚によるもので、武田家とは、仲のよい時は養子にやり、悪くなると戻したまでである。さて、上杉謙信とは謙信と父子の禮までしたのだから當然あつてべきであつたが、景勝から文句が出た。景勝は長尾氏の出、同じく謙信の養子となつてゐた。

景勝つひに武田勝頼の援を得て景虎をほろぼし、謙信のあとをついだ。

天正九年三月、信長、京都において馬揃の儀を行つた。(このことは前に、信長の尊皇のくだりに詳しく書いた)これは騎兵による觀兵式であり、演習である。鎌倉時代、室町時代にも行はれたが、安土桃山時代には最も盛大に行はれた。この時の馬揃は、信長が正親町天皇の觀覽に供するために催したものであつた。近畿諸國から名馬五百餘騎が集まり、いづれもみな秘術をつくした。餘事ながら、山内一豊またこの馬揃に秀吉の臣(祿四百石)として出場してをり、その馬は例の夫人の鏡の下から出た大金で買つたものであつた。

さて、この馬揃のため、信長の諸將京都に集まれる際を狙つて、上杉景勝、その部將をして越中松倉城を攻めしめた。加賀の一向一揆またこれに應じた。信長は、柴田勝家、佐々成政、前田利家等をしてこれを伐たしめた。同じく信長の將にして關東管領たりし瀧川一益は北信方面から越後を脅さんとしたので、景勝つひに越中經略を中止した。信長はその翌年(天正十年)三月、武田勝頼をほろぼしたので、上杉討伐はもはや時間の問題となつた。

然し、そのことなきうちに、信長は本能寺で明智光秀に殺されたから、上杉家はからくも命脈を保つことができた。

武田氏に對しては信長はいかにせしか。

武田勝頼は長篠の役に敗れたるのち甲斐にあつて兵を養ひ戦術の革新を圖つてゐた。尙ほ、その立場を有利にするために、上杉景勝をたすけて上杉氏の後援により上野の一部をとつた。そのため、景勝と争つた景虎の兄に當る北條氏政に怨まれた。その間に、徳川家康は天正九年中に、武田軍によつて占據せられてゐた遠江の諸城を陥れ、高天神城をも抜いて、やがて遠江一圓を領有した。

また美濃方面にあつては、信長の長子信忠が勝頼の根據地を奪つてゐた。

即ち、勝頼は、上杉家の内訌に手を出したために、織田、徳川からは領土を侵され、北條氏とは敵味方になつた。

しかも、勝頼は、はるかに毛利元就と氣脈を通じて信長を挾撃せんと圖つたが、あんまり双方の距離が遠いので連絡も十分にとれなかつた。そこで信長は中國方面を秀吉にまかせて、力を武田打倒に盡すことができた。勝頼は、かねて、信長の伯母が美濃の岩村城主に嫁してゐたので、その養子を入質としてゐたが、この入質（御坊と呼ばれた）を信長に還してその銳鋒を避けようとしたけれど、信長は聞き入れなかつた。

勝頼はいよいよ信長と一戦を交へねばならぬと覺悟した。彼は天正九年、居城を甲府から西

北に當る中田（今の北巨摩郡中田村）にうつして戦備を整へた。たまたま、信濃の本曾義昌が勝頼に叛いて信長に付かんとしたので、勝頼は義昌を討つために兵を諏訪に進めた。

信長は機到れりとはかり、進撃の部署を定めた。家康は駿河から、氏政は關東から、信長の臣金森長近は飛騨から、信長、信忠父子は木曾口から攻め入ることとなつた。

勝頼は天正十年二月諏訪口に進撃したが部將の統一がとれず、叛將相つき、勝頼命からがら甲斐の天目山（東八代郡にあり）にこもらんとした。しかも追撃急なるため果さず、民家で自殺した。辭世がある。

おぼろなる月もほのかにくもかすみ、はれて行衛の西の山の端

勝頼の夫人（北條氏）もこの時一緒に自殺してゐる。

この武田征伐において信長は、むしろ殘虐なまでに殘敵を殺戮した。これに反し、家康は武田氏の遺臣を擧用し、且つ勝頼のあとをよく弔うた。

其四 石山本願寺

石山本願寺。これは信長にとつて最も厄介千萬な存在である。今まで、一向一揆が信長、家康、謙信などを惱ませてゐたが、それはみんな石山本願寺と關係がある。そこで、ここに改めて、本願寺と一向一揆のことを歴史的にまとめて記すことにしよう。

浄土眞宗は申すまでもなく親鸞が源空の教を受けついでこれを新宗派となし、元仁元年（一八八四）開立した。親鸞遺言して「それがし閉眼せば賀茂川に入れて魚にあたふべし」と云ひ、また布教については、「ただ道場をば少し人屋に差別あらせて小棟をあげて造るべし」と教へた。もとより宗派をわかち、教権を張るなどは想像もしなかつたことである。

然るに、親鸞の死後、血をうけた遺族の人々と、教を受けた篤信の人々と、それぞれ同心相寄り教を傳へるにいたつて、浄土眞宗いつの間にやら十派にわかれた。さるが中に、文永九年（一九三三）龜山天皇勅して、久遠實成阿彌陀本願寺の號を賜ひ、定めて、勅願所とし給へる

こそは親鸞の血をうけたる系統のあづかり守るところとなつて、孫の如信が本願寺第二世となつた。傳へて七世存如の子蓮如、かねて本願寺の衰微をなげき、文明三年（二一三一）越前吉崎に一字の道場をつくつて布教したが不思議の魅力に加へて絶倫の精力あり、あまたの女に多くの子を産ませつゝ如來の有難さを説くほどに信徒求道の男女常に雲集し、やがて山科に立派なお寺が立ち、本願寺再びさかんとつた。蓮如、八十二歳の時、明應五年（二一五六）大坂石山に地を相して一寺を建立した。これ即ち石山本願寺の始である。

蓮如の死後、石山の寺には住持が無かつたが、十世證如の時、細川晴元に山科本願寺を焼かれたので、のがれてこの大坂石山の本願寺にうつり、次第に立派にし堅固にした。即ち寺は淀川の支流と猫間川とのぞみ、岸高く平野を望み、要害の地であつて、證如が堂宇を造るに當つては、加賀國より城作りを呼び寄せ、方八町に構へ、眞ん中の高き地形に御堂を建立した。また構の中には町人あまた住んで町をなしてゐた。教祖親鸞が「少し人屋に差別あらせ」と云ひのこしたのとは大變なちがひである。さるにても城作りを寺をつくらせるとは大仰であつたが、蓮如すでに他家、他派との抗争に悩み、これを支持する大名の兵力に抗争して、直ちに土民信者と結び武器を揃へて戦ふにおいては、寺院即ち城廓たらざるを得なかつた。

本願寺を支持するものは信徒であつた。もとは寺院は公卿、武將、大名などの庇護を受けてゐたのであるが、それらの權威は應仁の大亂以後失はれたので、寺院は自衛のために直に信徒に呼びかけた。即ち北陸の例に見るごとく、信徒たる土民は所得の半を寺に納めてあとは各自の財産とすると云ふ方針で、互にもたれあひとなつた上に、信者即ち狂信の徒で、戦死は即ち西方淨土へ行くことと信じてゐるから、宗旨のために命をおとすことを光榮としてゐる。また、その人名は多く史上に傳はつてゐないけれど、よく作戦し指揮する坊さんもゐたらしく、これに武將の來り投ずる場合もあつて（例へば三河の一向一揆に家康の部將が参加せることき）なかなか戦鬪力があつたのである。武器も十分に備へてをり、鐵砲も大名並にたくはへてゐた。

これらの狂信者を一向一揆と呼ぶのは、眞宗の信徒が一心一向に彌陀一佛を信するの外別の仔細無しとの教義によつて他宗の者がかく呼び初めたのである。「一揆」はもとより百姓土民の蜂起のことながら、戦國時代を通じ「一向一揆」と呼ぶ場合は「一揆」が平時の武装集團の意味に用ひられてゐる。即ち一向一揆とは眞宗狂信者武装集團の意であつた。但し、戦争が無い時は百姓もしてゐたし、商賣も營んでゐたのであるが、そのねばり強さから考へて、武器を扱ふ訓練もやつてゐたことと思はれる。これが戦國時代を通じて宗旨擁護のために血を流してゐ

たのであるから、ある史家は、世界宗教史上に類のない宗教戦争であつたとまで斷じてゐる。然し宗教戦争と呼ばれるには、餘りに多分に政略に利用されてゐたことも考へねばなるまい。

さてこの一向一揆は蓮如北陸に布教せしゆかりによつて、加賀、越中、越前にその勢すさまじく、蜂起せる當初においては加賀の領主富樫氏の一族が同宗の高田派を助けるのと戦ひ、つひに富樫氏自滅の因をなしたくらゐである。そのうち武田氏、毛利氏とは常に氣脈を通じてをり、その助力によつて織田信長に對抗してゐた。信長は一向一揆滅ぼすべし、石山本願寺追ふべし、あとに自分が入り込んで居城とすべし、と云ふ心組であつた。

信長は元龜元年（二二三〇）正月、石山本願寺に移轉を要望した。本願寺は拒絶した。その年八月、信長は東に淺井、朝倉、西に三好の殘黨を敵とした際、本願寺は淺井、朝倉方に味方し、かねてからの信長の野望を挫く主旨もあつて、信長と戦つた。信長の部將は戦利あらず敗退した。

信長はその後、淺井、朝倉と和し、三好の殘黨は撃退したが、石山本願寺は、その間大いに戦鬪力を養つてゐた。

信長は石山本願寺を狙つてゐたと同時に、また、比叡山延曆寺をにくんでゐた。延曆寺は天

台宗の總本山であり、鎮護國家の名刹でありながら、長く治外法權の地位にあつて、寺領多く安逸のうちに僧侶墮落してまた佛事を專にせず、山法師あまた寄生するにいたつて暴虐の限りを盡してゐた。そこで信長は京都に入つて京畿を平定するに當り、この叡山の墮落をにくむのあまり、且つは信長を絶えず脅してゐた淺井、朝倉に味方するを怒つて、元龜二年九月十二日全山を焼き僧侶を擧殺した。

このことは本願寺をして恐怖させ、警戒させた。信長は怖るべき佛敵であると思はせた。そこで、信長に當つて共に抗争するに足る大名、武家を物色した。さうして、手近に松永久秀、西國に毛利元就を得た。

松永久秀は三好長慶の臣である。三好長慶は足利將軍義輝を擁立した。而して、長慶がよく義輝を制肘し得たのは久秀の力による。そこで久秀の權つひに長慶をしのぎ、更に義輝を殺すにいたつた。下、上に刺つ、時勢とは申しながら松永久秀すぬふんとづぶとい男ではある。

信長は義輝の殺されたあと、義昭を奉じたが、義昭、しきりに信長をうとんじ、更に敵とするにいたつて、つひに信長との關係決裂して信長に放逐され、流浪の一庶民とされた。それでもまだ信長を滅ぼす志を失はず、松永久秀と氣脈を通じてゐた。その久秀はまた石山本願寺

と通じて信長に對する共同戦線を張つてゐた。

そこで信長は子の信忠をして、大和信貴山に據れる松永久秀を討たしめた。信忠は信貴山を攻めて久秀を敗死せしめた。

これで本願寺の支持者たりし松永久秀の方は片がついたが、のこる毛利元就は簡單には片づかない。

信長は元就に對しては秀吉を差向けておいて毛利軍の東上を狙ませた。一方、石山本願寺に對しては、その附近の民家を焼き拂つて包圍し、兵糧攻めにした。ところが本願寺は淀川の水を利用して、海路、西國との連絡をとつてゐた。ことに毛利氏の海上の勢力は、よく本願寺の海路連絡を可能ならしめてゐた。

そこで信長は、天正六年（二二三八）六月、伊勢の九鬼嘉隆に命じてつくらせたる鐵張の巨船六隻と瀧川一益のつくれる大船一艘とを堺に回船させた。この鐵船は伊勢灣海岸で造られたもので、幅七間、長さ十二、三間、鐵板を張り、大砲三門と數門の精巧なる長鐵砲を備へてゐた。六月二十六日、この七つの巨船が紀州沖をまはつて行く海上、本願寺方に味方する沿岸の信者ども小舟あまた漕ぎ出し矢と鐵砲をはなちかけた。九鬼嘉隆は小舟をわざと近寄せておい

て、大鐵砲で片ツ端からうち沈めた。七月、船が無事堺に着くと、信長は親しく堺に出かけてこれを見て大いに悦び盛宴を張つて祝した。この年十一月、本願寺に物資を送り込まんとて西國から來れる六百餘艘の船隊は、散々にこの強大船隊に蹴散らされた。

本願寺包圍軍の一部將に荒木村重があつた。もと三好氏につかへ、のちに信長に屬して戦功あり、出身地の攝津一國をたまはり、治めてゐた。彼はかねて信長から叛意ありとにらまれてゐたので、その疑を晴らさんとしたけれど、信長をして釋然たらしめ得なかつた。そこでつひに進んで信長に叛き、毛利元就と通じ、本願寺と呼應するにいたつた。高槻城主高山重友亦荒木村重に味方した。高山重友は軍功によつて信長にこの城を貰つた恩義があるのに信長に叛いたのである。信長はこの聯合勢力の成らんとするを重大視して、朝廷へ正親町天皇の御代であるに對し御斡旋方を奏請した。朝廷におかせられては本願寺の當主顯如に、勅命をお下しになつた。顯如は舊好によつて毛利元就と和を共にせんことを請うたので、勅命は元就にも下された。たまたま、高山重友が耶蘇教師の斡旋によつて信長に降つたので、信長は有利となり本願寺に條件を承認せしめて和した。その條件は本願寺方の僧俗一切をゆるす、大坂は七月盆前に引わたすこと、大坂退城と同時に天王寺北城、太子塚、花隈(神戸)尼崎の諸城は退城と同

時に明けわたすこと、但し末寺は今まで通りとする、尙ほ念のため本願寺から人質を出すことと云ふのであつて、和議とは云ふものの、實は本願寺方の降伏を求めたのであつた。顯如はこの時の勅使にしたがへる關白近衛前久とは姻戚であり、子の教如は前久の養子として得度したと云ふ關係があり、かたがた、もはや支へる力もないことを知つたので、信長の條件を承認したけれど、嫡子教如は石山を去るにしのびずとて頑張つた。然し、教如も近衛前久の斡旋によつてつひに大坂を退去した。

この時の、顯如と教如との父子の離反は、のちに本願寺を東、西兩本願寺に分立させる因となつた。

荒木村重はこの和議成立後、安藝にのがれた。村重の家臣中重立つた者五人は高野山にのがれた。天正八年三月、堺の奉行松井友閑はそれら五人の者をとらへんとして高野山に入り、あべこべに一山の大家に殺された。信長大いに怒り、天正九年八月、高野山から諸國に下つてゐる僧千三百八十三人を安土の城下と京都市中とで殺して高野山破却を宣言した。ついで信孝をして高野山を攻めさせたが、やがて本能寺の變でこの討伐は中絶された。

第八章 中國征伐

其 一 毛 利 氏

信長は石山本願寺を包圍してやがて降伏させ京畿における最後の患をのぞいたが、その間、本願寺をたすける毛利氏に對し、先づ羽柴秀吉をつかはして制壓せしめた。

毛利氏は大江廣元より出づ。廣元の子季光が相模の毛利庄を領したので毛利氏を名乗つた。

季光の孫時親安藝國吉田にうつり、傳へて十代にして元就がついだ。明應六年の生れで、信長が生れた時は三十八歳であつた。

氏 利 毛

元就は周防の大内氏に屬してゐたが、天文二十年（元就五十六、信長十八）陶晴賢が大内義隆を殺してから四年ののち、弘治元年、嚴島の戰に晴賢の軍をやぶり、やがて大内氏の領土をも併せた。ついで出雲の尼子氏と石見に争つて勝ち、つひに尼子氏をも滅ぼした。この間、永祿三年には正親町天皇に御即位の料を献上して桐菊の御紋をたまはつた。かくて次第に隣國を征服し、その所領、安藝、周防、長門、備中、備後、因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐の十箇國

に及んだ。元龜二年死す、年七十五。信長が比叡山延暦寺を焼いた年である。かねてその存在を薄氣味悪く思つてゐた信長は、毛利氏のあとがどうなるかと注意してゐる。元就死にのぞんで三人の子に矢を折るたとへで協力すべきを教へたと云ふことはうそである。子の隆元は元就より先に死んだので、あとは嫡孫の輝元が繼いだ。時に年十九。輝元の名は將軍義輝の一字を受けたくらぬだから、毛利氏は元就時代から足利氏の殘滓たる義昭と通じて信長に當らんとしてゐたのである。將軍職を追はれた義昭を毛利氏ともあらうものがよくも助けようとしたものと思はれるが、最初にも注意した通り、戰國時代は下剋上の思想の半面、上下君臣の義も存してゐたのであつて、足利將軍家の威望はいまだ大名の間に全く失はれてをらず、その下にあつて志をのべんとする大名もあつた。毛利氏も、あながち信長のやうに利用し盡したら放り出すと云ふ肚で義昭と結んだわけではないのである。

然し、輝元の代になつてみると、信長の勢いよいよよさかんとなつたので、毛利氏として、元就亡きあと、義昭をかばつて信長を敵とするのは無益の戦をかもすばかりである。ことに、元就の遺志は、毛利家として現在持てる國を確保し、これ以上進んで領土をひろめることは望まない、と云ふにあつたから、輝元は義昭を自分の力でかばふことはしない方針をとつた。さる

かはり、信長に説いて、信長の意思として義昭を將軍に復職させる途はないものかと計畫し、天正元年十一月、安藝の安國寺の住職惠瓊を特使として信長にそのことを説かしめた。然し、義昭は信長の眞意を疑ひ容易に入洛しようとしなかつたので、この計畫は實現されなかつた。

義昭はそののち隆々たる勢の毛利氏をよたつて、天正三年（二二三—五—信長四十二歳）ひそかに備後の鞆に着いて輝元に助力を請ひ、桐の紋を興へた。毛利家の紋は一文字に三ツ星と澤瀉との二つであるが、この時代には紋章を勳功ある者に興へて「同紋黨」とすることが行はれてゐたので、義昭も將軍家の格式をもつて紋章を興へたわけであるが、よくよくほかに贈る物が無かつたのである。義昭は後半生を通じて、將軍に復職しようとはかかない夢を追うて老ひ込んだ人であるから、二十も若い輝元の機嫌をとりむすんだことに不思議は無い。彼は上杉謙信に、毛利氏が自分を助けるのだから貴殿も助けていただきたい、と申入れてゐたのであつた。

ところが、謙信は天正六年に死んだので、義昭は望の綱の一本が切れた思ひである。信長は大安心で、これより専ら銳鋒を毛利輝元に向けて中國を經略することができるようになつた。毛利輝元は、信長より十九歳若く、天正五年、信長が秀吉を西國平定の先鋒として播磨に派

した時は二十五歳であつた。吉川元春、小早川隆景と云ふ二人の叔父がよく輝元をたすけてゐた。

其二 秀吉の西征

信長が西日本を經略せんとした時、岡山の浮田直家が毛利輝元の前衛として頑張つてゐた。當時、播磨の御着の城主小寺政職は直家のために自分の領分が狙はれてゐるのを心配して、信長に求め、自分が信長西國經營の先鋒にならうと申入れた。信長これを容れて、羽柴秀吉を播磨につかはし、中國經略の總帥たらしめた。

秀吉は天正五年十月、姫路城に入つて、ここを本據とし、浮田直家の屬城たる播磨の上月城（佐用郡）を陥れた。直家は、いよいよ信長と戦端をひらくの日が來たと思つたから、援を輝元に求めた。

姫路の東方、加古川から北へ入つたところに三木城がある。城主は別所長治。村上源氏の出でこの地方の豪族である。信長、義昭を奉じて入浴した時義昭を援けた。それくらゐだから秀吉はこの城を後にして姫路に進出したのである。ところが、長治は信長が西國征伐の後或は更

に自分を討つのではないかとの懸念あり、且つは秀吉の己に對する態度家臣にのぞむがごとき
に不満を抱いて、信長にそむき輝元についた。秀吉百方慰諭したが應じないので、秀吉、三木
城を攻めた。

秀吉が軍をめぐらして三木城を圍んでゐる間に浮田直家は上月城を奪回するため吉川元春、
小早川隆景の軍と共に、これを攻めた。秀吉は織田信忠をして三木城に當らしめて自らは上月
城をたすけたが、力及ばぬと見て、信長の許可を得て上月城を棄て、全力を三木城に注いだ。
たまたま、攝津の荒木村重が石山本願寺、高槻城、花隈城などと相呼應して信長に當り、三木
城を援けんとしたが、秀吉よくその連絡を斷ち、兵糧攻めにして、からくも三木城を抜いた。
かくて秀吉は播磨東方に向ふことができた。浮田家はもと百濟からの移住人で、毛利氏につ
いてゐたのは備前、備中を平定する便宜上助力をうけてゐたのであるが、今や信長の將秀吉、
播磨の東半部を平定して上月城に迫ると見て、援軍まで派してくれた毛利氏を袖にして信長方
についてしまった。これによつて、その領土、備前、美作は信長のものになつた。

次は備中である。

秀吉が播磨に向ふより以前、明智光秀は天正三年以來丹波に入つて諸城を攻めてゐた。天正

六年には八上城（今の兵庫縣多紀郡にあり）の波多野秀治を攻めた。城が容易に落ちないので
光秀は養母を人質に入れ、秀治、秀尙兄弟を誘致して安土に送つた。この人質交換によつて八
上城を陥れんとしたのだが、信長は秀治、秀尙兄弟を殺したので、八上城の守將また光秀の養
母を殺した。光秀憤激して八上城をほふり全城の生きものを屠殺した。光秀かくして丹波を平
定したので、信長は賞として丹波を光秀に與へた。光秀は、すでに天正元年近江の石山を降し
たのち近江の一部を信長から與へられてゐるが、これによつて丹波をも領國となし龜山に城を
かまへた。

丹波は一色氏の領であつたが細川藤高（幽齋）が光秀等の應援を得て平定し、藤高その領主
となつた。信長の功臣を賞するや甚だ氣前がよろしい。

天正八年五月、秀吉兵を轉じて因幡に入り、九年十月、鳥取城主山名豊國を降し、更に伯耆
を侵した。吉川元春、よく寡兵をもつて秀吉の軍に當つた。嚴冬に入つて兩軍兵を撤した。

秀吉は一旦姫路に歸つて、天正九年十一月淡路を平げ、瀬戸内海の制海權を得るの準備とし
た。

時に、吉川元春、鳥取を奪回せんとして再び兵を山陰に進めたので、鳥取城守將宮部繼潤か

ら秀吉に援を求めたが、秀吉は備中攻略の準備が成つてゐたので、城を固く守ることを命じて自らは天正十年四月、大軍をひきゐて高松城に迫つた。

この年、天正十年において、織田信長の所領及びその勢力範圍は、近江、美濃、伊勢、志摩、尾張、山城、大和、河内、和泉、若狭、越前、丹波、丹後、備前、美作、攝津、播磨、但馬、因幡の全部、飛騨、加賀、紀伊の一部、合計六百五十萬石であつて、一萬石につき兵二百五十人とすれば、全兵力（推定）は約十六萬三千人となる。而して、織田氏の領土に接する強敵を見るに、甲斐、信濃の武田勝頼は天正十年三月天目山の麓の民家で自殺し、越後、越中、加賀能登を征したる上杉謙信は、四年前の天正六年三月に客死して、あとは養子の景勝がついだが天正九年以來信長に領土を侵されて、十年には能登、越中を奪はれ、また北信濃をも侵されてゐた。而して、關東の北條氏は、房總の里見氏、越後の上杉氏と長らく境を争つてゐたが、とも角、伊豆、相模、武蔵、房總半島、合せて八箇國を領有してゐる。しかも、今、氏政にいたつて、自重して動かす、多く信長の心を煩すにいたらない。

同じ年の天正十年における毛利氏の勢力はいかに。安藝、周防、長門、備後、備中、伯耆、出雲、石見、隱岐、合計百六十二萬石、兵力推定四萬人で、織田方の約四分一と見られてゐた。

時を同じうして九州には、南の島津氏と對立して北方に大友氏あり、領國は豊前、豊後、筑前、筑後、肥後に亘り、毛利氏の隙をうかがつてゐたので、この背面の大敵にも備へねばならなかつた。この時、毛利輝元は三十歳、叔父吉川元春五十三歳、小早川隆景四十七歳。

信長この時四十九歳。秀吉は四十七歳。而して、高松城を守る清水宗治は四十五歳。いづれも男盛り、武將盛り、信長戦史の最後を飾るにふさはしき年齢ぞろひである。

そもそも、高松城は岡山の西北方約二里、足守川のほとり、平地よりわづかに一丈三尺の築地に構へたる平城であつて、周圍には沼が多かつた。附近に七つの堡砦がある。

城將清水宗治は永祿年間この地方の諸豪族を統一して旗頭となり、小早川氏に屬してゐた。今、毛利氏のために秀吉の大軍を防ぎ止めんとするに當つて、輝元、宗治を召して領邑を増やさうと云つたが、宗治辭して受けず、曰く「秀吉しきりに諸豪を説いて服せしむ、想ふに君、不肖の心事を疑つて秀吉に附かざらしめんがために優遇せんとするならん、故に敢て受けず」と。歸つて固く高松城を守る。城兵は部下三千人に小早川隆景よりの援軍二千人、農民の志願者五百人、合計約五千五百人であつた。

秀吉は果して宗治を好餌で釣らんとした。備中、備後の二

宗治もとより斥けた。よつて秀吉は先づ高松城の屬城を陥れ、四月二十五日から高松城の攻撃にうつつた。秀吉の軍勢は、秀吉軍一萬五千、羽柴秀勝（織田信長の子、羽柴家に入つて秀吉の長子となる、秀次の兄）五千人、宇喜多忠家一萬人、合せて三萬人、まさに守備軍の五倍弱に當る。

城兵はしばしば弓、銃を放つて挑戦したけれども、秀吉は地形上味方の損害多かるべきを思ひ、河水の増加をまつて水攻にせんと構へてゐる。

五月七日（新曆六月七日）から足守川に堰堤を築いて流水をとどめ、城の東南方蛙ヶ鼻と堤とをつなぐ堤防を築いた。堤防の高さ四間、幅は頂上六間、底十二間、長さ二十六町である。次に、高松城の東北方、丘陵の間を流れる長野川の流水をもせきとめて西南方に放下し、足守川の流水と合せて城下に奔流させることとした。河流の閉塞には約三十艘の船に石を満載して沈め、その上に巨石を積み、草茅、木柴をもつて隙をふさぐ。また堤防には土俵を用ひた。人夫には士卒を使ひ、補充として土民に、土俵一個毎に錢百文、米一升を與へて協力させた。かくて水攻の準備はわづか十二日間で完成された。

秀吉は城を陥れるのは困難でないと見たが、四月中旬、小早川隆景が援兵をひきゐて來たの

を機會に、信長に親しく西下して指揮せんことを請うた。この大功を自分一人の功とすること、信長に對して憚つたのである。信長は五月十五日この使者を引見し、「みづから毛利氏をほろぼし進んで九州を平定するは余の願ふところである」と、この要請を容れた。秀吉、すつかり信長の心を看破してゐたのである。

信長は即日、明智光秀、筒井順慶等の諸將に命じて秀吉應援に進發せしめた。子信忠またこの西征軍に従ふこととなつた。

毛利方も、もちろんこの高松城の危急を救ふことに力を注いだ。即ち、小早川隆景の軍に吉川元春また伯耆から來り合して、總勢三萬余人となつた。

然るに、毛利方の援軍は、天候や地形に災されて十分に城を助けることができなかつた。そこへ、信長近く大軍をひつさげて西下すると、情報が入つた。水攻の水はドンドン城を侵してゐる。つひに毛利方から羽柴軍に和議を申入れた。その使は、さきに毛利氏から信長へ義昭復讐問題について特使として派せられた安國寺の惠瓊である。

この惠瓊と云ふ坊さんは毛利輝元に非常に信頼されてゐたが、なかなか辯才にも長けてゐた上に、靈感の鋭い坊さんであつた。天正元年に始めて信長に會つて歸つてから輝元に「信長の

代、五年三年は持たる可く候。明年は公家などにならる可く候かと見覚え申候。左候てのち、高ころびに、あをのけにころばれ候づると見え申候」と豫言した。天正元年の「明年」天正二年には、信長参議に任せられ、従三位に叙せられた。即ち「公家などになられた」のである。それから五年三年は正に持ちつづけてゐる。即ち天正五年に秀吉を中國征討の元帥としたのである。それから五年たつて天正十年が今高松城水攻めであり、やがて本能寺の變であつた。輝元、惠瓊の言をほんとうに信じ切つてゐたなら、たやすく媾和は申入れなかつたであらうが、あんまり話がうますぎるので、そこまでは信じ得なかつた。ついでながら惠瓊の名は再びあらはれないからその終を記すと、のち秀吉に仕へて伊豫六萬石を興へられたが、關ヶ原役では毛利方について石田三成をたすけ、敗戦後鞍馬山にのがれたが、つひに慶長三年十月捕へられて斬られた。

さて毛利方の出した條件は、

- 一、毛利氏は備中、備後、美作、因幡、伯耆の五州を織田氏にゆづること。
 - 一、織田氏はよろしく高松城將士の生命を保存すること。
- だいぶ氣前がよい。尤も、備後は完全に毛利氏の物となつてゐたが、あとの四州は織田、毛

利兩氏争奪中の地域であつた。然るに、當時信長の増援隊は大部分すでに出發してゐたので、秀吉はこの好條件をも拒否した。

高松城中では一切外部との連絡を断たれてゐるため、眼前の援軍が少しも戦闘にかからないのに失望した。城將宗治は自分で夜警までして叛逆者が出るのを防いだ。ある日城外の濁流を泳いで一人の武士が城に着いた。竹筒の中の密書は輝元、隆景兩人から宗治に宛てた降伏勧告の書状であつた。宗治聽き入れずして防守に一だんと力を入れた。

惠瓊は秀吉が城將の首を得ずんば圍を解かざるべきを推察して、城中に特使を派して宗治に意嚮をただすと、宗治も「一死城内の將士にはらん」と答へた。よつて惠瓊からその旨を秀吉に通じた。秀吉は承認した。それは六月二日のことである。

ところが、その日、六月二日に、織田信長は本能寺で明智光秀のために夜襲をかけられ自殺した。その報は翌三日夜半秀吉の許に着いた。同時に、明智方から毛利氏へ信長自害の事實を報じて秀吉を追撃せよと申送つた飛脚を、高松城の南方二里弱の庭瀬で引つとらへて監禁し、翌四日朝惠瓊を招いて、次のやうな新條件を提出し、且つ誓書を交換して和議を成立させた。

秀吉方の條件

一、割地は、山陰道にあつては、伯耆の八幡川、山陽道にあつては備中の河邊川を堺となし、若干の讓歩をする。

一、城將清水宗治は自裁させること。

秀吉の示せる誓書

起請文の事

一、公儀に對せられ御身上の儀、われら請取り申候條、聊か以て疎略に存す可からざる事。

一、申すに及ばず候と雖も、輝元、元春、隆景、深重所在に存ぜず、われら進退にかけて見放し申すまじき事。

一、斯の如く申し談じ候上は、表裏抜公の事之有る可からざる事。

右の條々、若偽之有るにおいては、日本國中大小の神祇、殊には八幡大菩薩、愛宕、白山、摩利支尊天、別しては氏神の御罰を罷り蒙る可きもの也、仍て起請文件の如し。

天正十年六月四日

羽柴筑前守秀吉血判

毛利右馬頭殿

吉川駿河守殿

小早川左衛門佐殿

第一項は領土割讓による和議成立への挨拶であらう。第二項は毛利方三巨頭の地位名譽を重んずる旨の約束と見える。それをたがふとこれこれの神罰を蒙る、と云ふのは戯談ごとや儀禮的の文句でなく、心から神かける氣持があつたのである。當時の武將大名の敬神の念は眞にかくのごときものであつた。

開城と聞いて、高松城將清水宗治は、自裁の日たる六月四日の前日に、城内の掃除をさせ、物品の整理をして記帳させ、その上で入念に身だしなみをした。側近の者が理由を聞くと、宗治が答へて云つた。「三十餘日の籠城の苦しさに、たしなみを忘れたと言はれるのは死後の恥である。その恥は宗治一人の恥でなく中國武士の恥である。殊に、この首は戦に敗れて秀吉、信長に面會するのではなく、媾和の一條件にすぎない。媾和の使者が髻蓬々としてゐるのは、禮を失ふものである」。

自裁の當日、秀吉は檢視をつかはし、且つ、酒樽五荷、肴、上林極上挽茶一袋を贈つて、籠城の苦をなぐさめた。宗治はよるこんで受納した。

宗治は小舟に酒肴を載せ、兄の月清入道及び援將、近臣等と共に、秀吉の陣營蛙ヶ鼻近く漕

ぎ寄せて、最後の酒宴を開き、宗治は謡曲「誓願寺」を謡ひ、且つ舞うたのち、
浮世をば今こそわたれ武士の、名を高松の苔にのこして
の辭世をのこして、切腹した。時に年四十六。
秀吉、厚くこれを葬つた。

第九章 本能寺